

環日本海交流史研究集会記録

「鉄器の導入と社会の変化」

はじめに

谷内尾 晋司（所長）

日本列島のほぼ中央部にあって日本海沿海域に位置する石川県は、古来より、東西文化交流の結節点としての役割を果たし、特色ある歴史文化や風土を育んできました。こうした石川県の歴史的特徴を理解するには、諸外国を含めた日本海沿海域各地との交流の実態の解明が欠かせないと考えられます。また、石川県はもとより、日本海沿海域各県の埋蔵文化財調査機関では毎年新たな発見が相次いでおり、累積した膨大な調査成果をどのように研究し活用していくかが大きな共通的な課題となっております。このため、当センターでは特別会計事業として、「環日本海文化交流史研究事業」を企画し、平成12年度より、交通交易、道具、生産など各テーマ別の研究グループを組織して、基礎的な調査研究を進めるとともに、沿海域各地の研究者にご参集いただき、年1回「交流史研究集会」を開催しているところであります。

平成13年度は2月22日（金）に当埋蔵文化財センター研修室において、「鉄器の導入と社会の変化」というテーマで開催いたしました。鉄器の普及や発達、生産力を飛躍的に向上させるとともに、戦闘形態の変化や集団の階層化を促進するなど、社会変化のメルクマールをなすものであり、その生産や流通は、地域間交流史を考える上で、重要な研究課題であります。近年、日本海沿岸地域では、初期段階における多数の鉄器や鍛冶工房が発見されるなど、資料が集積されつつあり、各地の鉄器の質・量、製作技術などを比較検討することが可能となってきました。このような状況を踏まえ、今回の研究集会では、鉄器の導入・普及が地域社会に与えた影響について焦点を当て、北部九州地方については福岡県の橋口達也氏、山陰地方については島根県の池淵俊一氏、丹後地方については京都府の野島永氏、北陸地方については石川県の林大智氏、福井県の佐々木勝氏、新潟県の小池義人氏、東北地方については青森県の斉藤淳氏、北海道地方については三浦正人氏にお願いし、各地域の実態や状況をご報告いただき、研究討議をおこないました。

報告や討議の中で、集落や墳墓での鉄器出土の在り方等から、鉄器の導入や生産・普及が各地域における社会変化の画期や指標となりうること、大陸・半島から日本列島各地への導入・流通ルートとして、北九州～瀬戸内ルートと別に、武具など鉄器の形態比較等から丹後、北陸を経由した日本海ルートが東海や瀬日本（瀬内）の鉄器導入、普及に強く寄与していた可能性が高いこと、また、その流通には玉生産との関連が考えられること、古代の東日本にあっては、オホーツク文化など北からの交易も視野に入れなければならないこと、などが取り上げられ、話題となりました。いずれも北陸における鉄器の受容や生産の歴史的位置づけを考える上で大きな刺激を与えるものであり、これからの地域間交流史研究の視点や方向性を示す重要な課題の提供を受けたことは大きな成果でありました。

当センターでは、今後とも、テーマを替え、継続して年1回の「交流史研究集会」を開催してまいりたいと考えております。ささやかではありますが、この事業が日本海を媒介とした地域間交流史研究の進展に一定の役割を果たし、多少とも日本海沿岸地域の特性を把握し、本県が持つ歴史的意義の解明に寄与することが出来ればと思っております。さらに、この「交流史研究集会」が日本海沿岸地域の各調査機関等の研究交流の場となることを願っております。皆様のご協力をお願いいたします。



北部九州における鉄器の出現と普及

橋口 達也（福岡県教育庁文化財課）

日本では弥生文化成立当初から鉄器が導入されて使用されている。当初は斧等の工具の使用から始まっている。斧（板状鉄斧、袋斧）・刀子・鉋等の工具は次第に量を増すが、中期前半頃までは絶対量は少なくまだ大陸系磨製石器が主流を占めている。しかし鉄器の優れた点はすぐに認められていき、既に前期末の段階で鉋・刀子・鏃等の小形鉄器および板状鉄斧等の簡単な鉄器の製作は輸入された鉄素材を用いて行われていた。袋状鉄斧も中期前半には確実に国内生産されているが、可能性としては、前期末に遡ると考えられる。

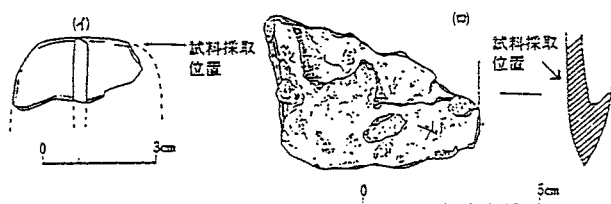
中期中頃から後半になると鉄製工具はさらに普及し、石庖丁等の一部のぞき、石器は消滅していく。また同時に鉄剣・鉄矛・鉄戈等の鉄製武器が出現し（鉄刀の出現はややおくれる）、石製武器・青銅製武器を駆逐し、青銅製武器を祭器の位置に追いやり、急速に普及していく。弥生時代は稲作農耕により余剰生産物が生じ、熾烈な土地争い・水争いを通じて首長権が確立され発展する時代である。中期後半は、前期後半から中期前半の段階における近隣聚落の争いから末廬・伊都・奴国等の旧郡程の範囲を領域とする地域的・政治的なまとまりが形成される。これがすなわち中国史書に「クニ」と記載された領域であるが、春日市の須玖岡本、前原市の三雲南小路の甕棺に示されるような前漢鏡30面余等を副葬した盟主的首長も出現し、首長権もさらに強力となっている。したがって戦いも領域争いへと質的に変わっていく時代である。鉄鏃の刺さった人骨、鉄製武器で傷ついたあるいは首をはねられた人骨の出土例等があるが、そういう戦闘が広範囲に行われて鋭利な武器を必要とした内部的条件と、前漢後半以後鉄製武器が中国大陸周辺に波及するという国際的条件とも絡めて、鉄製武器の普及はとらえられる。

農具の鉄器化はかつては武器等と同じく中期後半頃からとされていたが、近年の成果からいえばかなり遅れて後期後半頃と考えられる。

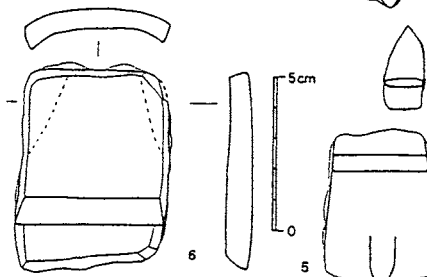
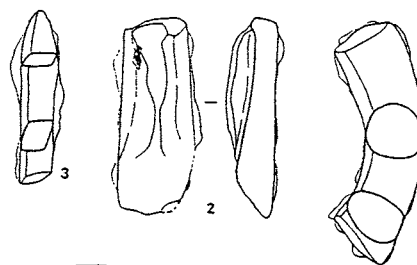
農具が鉄器化される北部九州の弥生後期後半から終末期、すなわち畿内 様式から庄内式の段階には、瀬戸内・畿内はもちろんのこととして関東でもかなり鉄器が普及している。

畿内では 様式の鉄器はきわめて少なく、 様式で若干増え始め、 様式から庄内式の段階では北部九州の中期後半頃と同じような普及の状況を示している。畿内の研究者のほとんどは、鉄器そのものの出土が少ないことから鉄は錆やすく消滅するし、また再生して作り直すから実物は残りにくいと考えており、したがって石器の消滅から鉄器の普及を類推するというのが鉄器研究の主流であり正攻法であると主張している。石器の消滅が鉄器の普及という問題と関連することは当然のことではあるが、鉄器そのもので開始・普及を論じている北部九州の私どもから見るとこの論法は消極的な方法である。私はかつて鉄器が出土しないのなら、これから鉄器用の砥石に注意して鉄器の普及に言及するならまだ少しでも積極的な方向となると提起したことがある。北部九州では例えば飯塚市の立岩10号甕棺、日田市の吹上1号甕棺、大分県天瀬町の五馬大坪木棺墓等に鉄器と砥石が副葬されており、前期古墳では農具・武器とともに砥石の副葬は一般的となる。

古墳時代にはいると前期古墳には鉄製武器・農具を多量に副葬するのは一般的であって、鉄器が普及したと同時に、首長層へ鉄器が集中したことも示している。

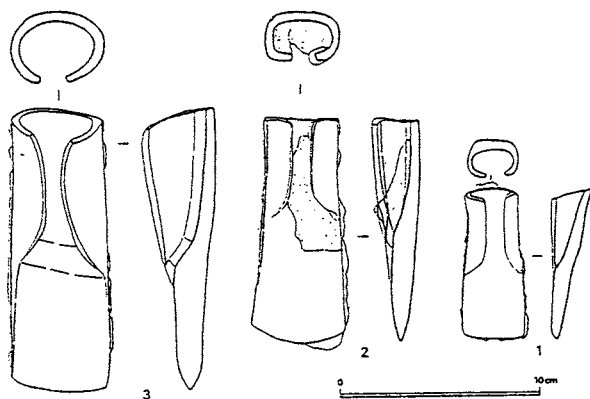


(イ) 福岡県曲り田遺跡出土 (佐々木、赤沼1992「山口県豊浦町山の神遺跡出土の鉄製鋤先」『豊浦町史三』豊浦町教育委員会)
(ロ) 熊本県斉藤山遺跡出土



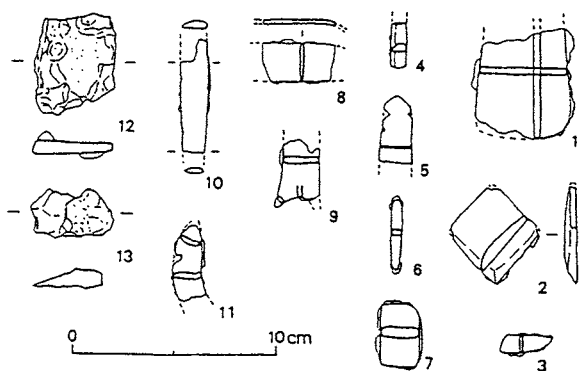
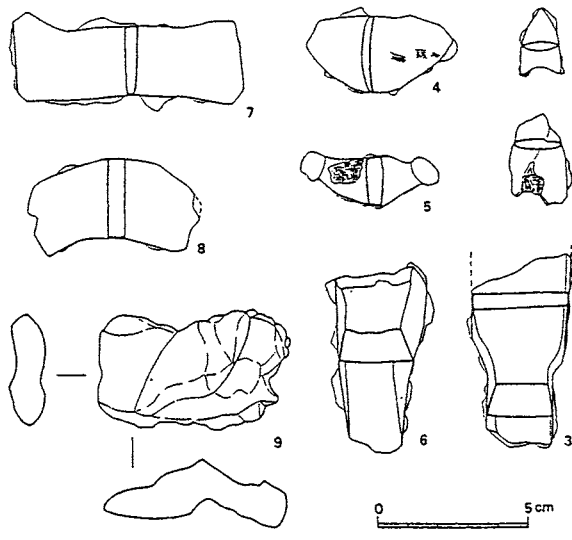
赤井手遺跡出土の鉄素材・未製品

1～3 5号土壇、4 9号土壇、5 64号住居跡、6 A地点西斜面



国産品と思われる鉄斧

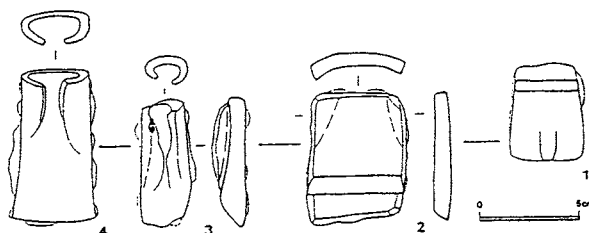
1 福岡県八女市亀の甲、2 福岡県吉ヶ浦、3 佐賀県千塔山



鉄素材・未製品と考えられる関連資料

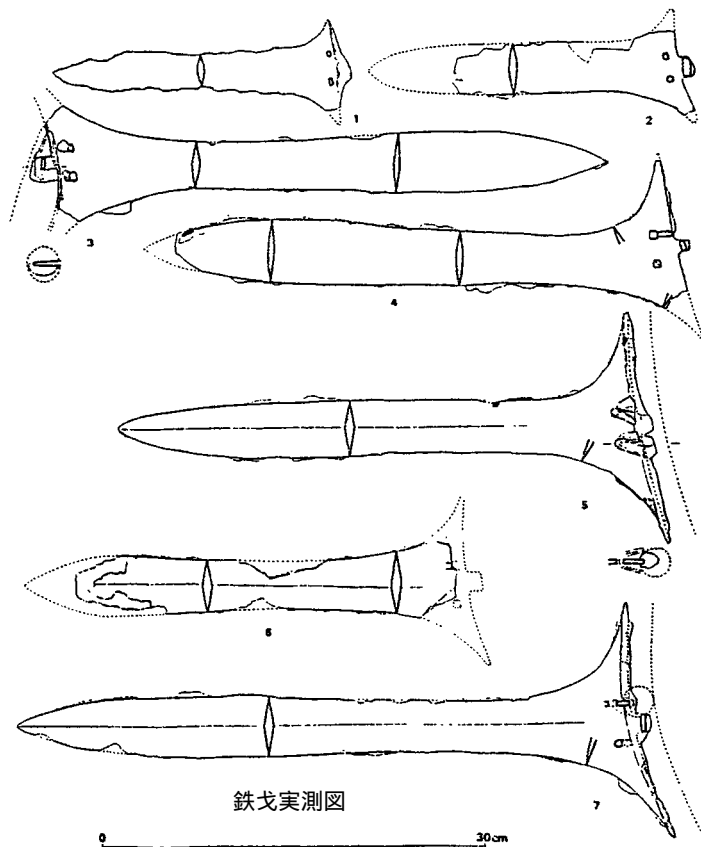
1 門田辻田、2 三雲加賀石、3～11 三雲番上、12 馬場山 N 21、13 馬場山 DA 2

赤井手33号住居跡(鉄器製作工房跡)出土の鉄素材・未製品・製品



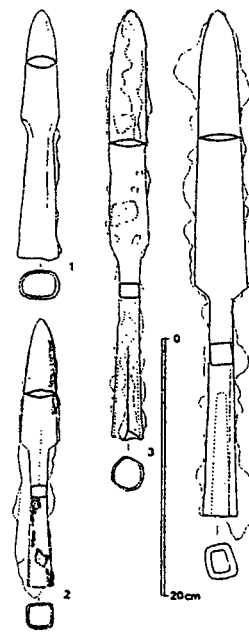
赤井手出土鉄器による鉄斧製作工程模式図

1 64号住居跡、2 A地点西斜面、3 5号土壇、4 溝2



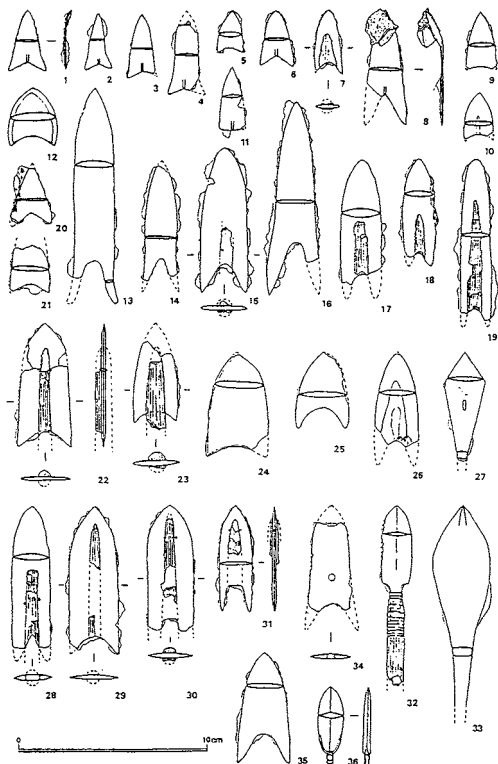
鉄戈実測図

- 1 須玖 2 御床松原 3 吹田 4 上り立
5 立岩堀田 K34 6 山崎 7 立岩堀田 K35



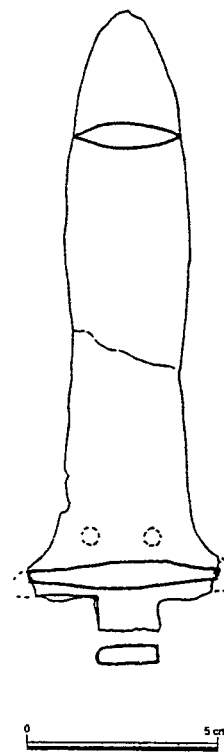
鉄矛実測図

- 1 下伊川 2 立岩 K36
3 立岩 D 2 4 元松原

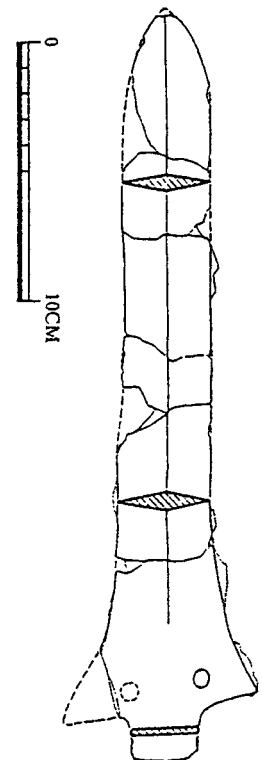


鉄鏃実測図

- 1 ~ 4 吉ヶ浦 5 赤井手 6 ~ 8 三津永田 9 門田 10・33 肥前国府
12・13 小笹 14~16 原の辻 17~19 シゲノダン 20 年の神 21・22 栗田
23 桶田山 24 神松寺 25~27 千塔山 28 木坂5号石棺 29・30 汐井掛
D 167、31・32 平 34 神谷川 35 桑飼下 36 船橋



鉄戈
茶戸里遺跡一号墓



宗像市梅木遺跡



山陰地方における鉄器の導入と社会の変革

池淵 俊一（島根県教育庁文化財課）

1. 山陰における弥生時代鉄器普及の諸段階

当地での鉄器の普及は、弥生時代中期中葉までは舶載鑄造鉄斧片等が散見されるにすぎず、中期後葉から本格化する。この時期の鉄器は島根県国竹遺跡例など、山間部出土の大型板状鉄斧が目立つ。これらの鉄器は広島塩田式系土器を伴う例が多く、瀬戸内方面からの鉄器流入ルートを示唆する。その一方で、青谷上寺地遺跡では舶載鑄造鉄斧片を片刃の板状鉄斧に転用した資料が一定量存在し、この段階に瀬戸内方面からの流れとともに、日本海側からの鉄器流入も本格化したことが窺える。またこの段階の袋状鉄斧には稚拙なつくりのものが存在することから、在地での生産が想定される。

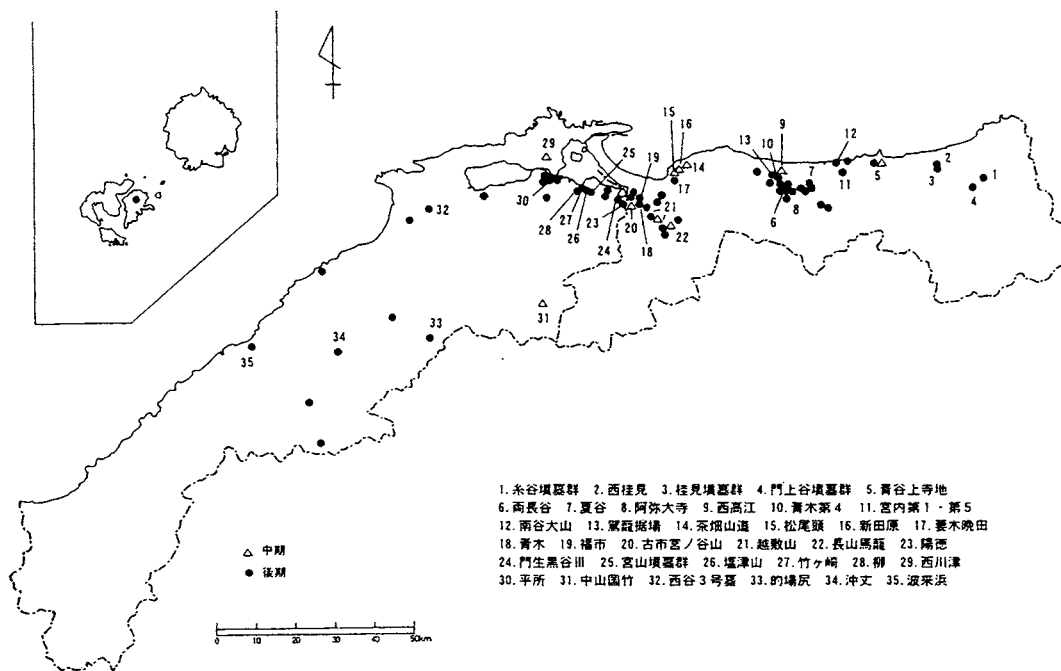
後期前半には一部の器種を除いて石器はほぼ消滅する。また鉄鏃に無茎三角形式が目立つようになるなど、当地の鉄器生産が顕在化し、地域色が認められるようになる。次の後期後半～末には当地の鉄器出土量は急増し、特色ある鉄器文化が成立する。

2. 山陰の弥生時代鉄器の特色

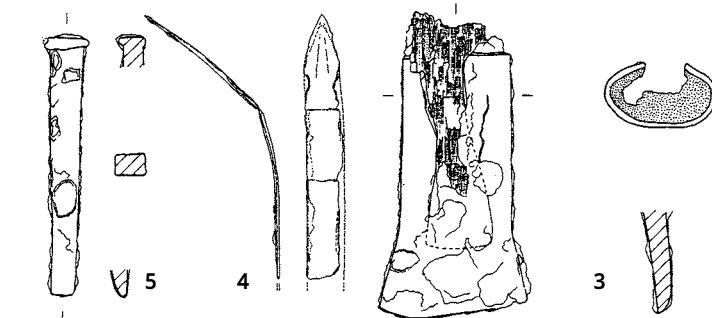
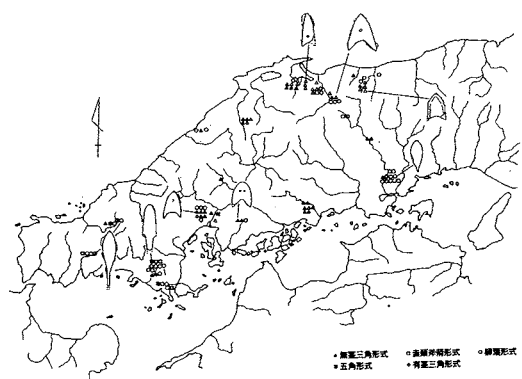
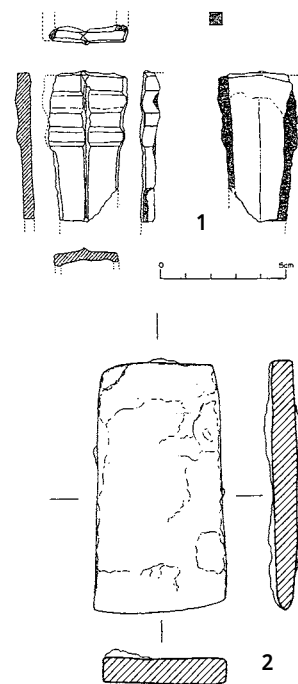
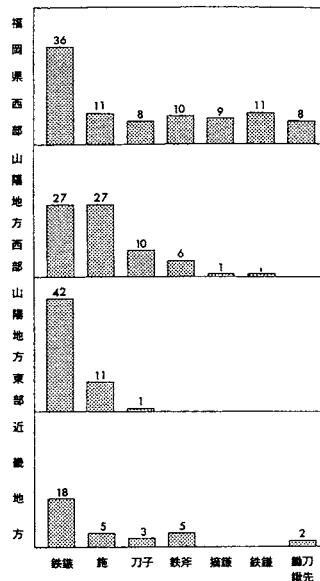
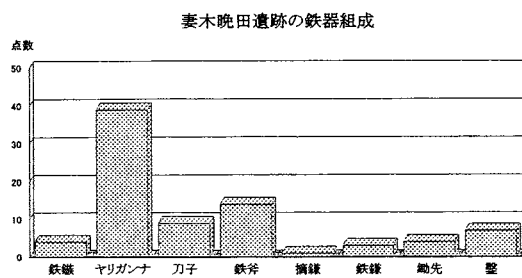
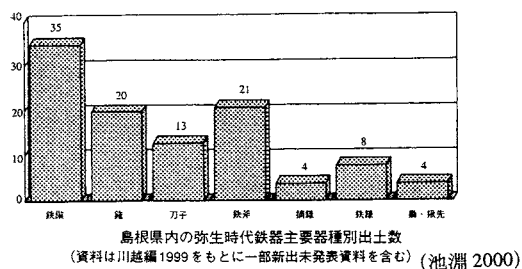
山陰の弥生時代鉄器の特徴としては、まず組成の面からは、鉄斧が多い点、鉄製鋤・鍬先が安定して認められる点等を指摘できる。ただし、妻木晩田遺跡や青谷上寺地遺跡など鉄器多量出土遺跡の様相をみると、鉄器組成にかなり差があり、同じ山陰でも生業形態や立地条件によって器種のウエイトが異なる状況が認められる。器種ごとの特徴をみると、鉄斧では板状鉄斧と同程度もしくはそれ以上に袋状鉄斧が普及し、東部瀬戸内・畿内とは一線を画す地域性を形成する。鉋は身部が断面矩形で身部と刃部幅が変わらないタイプが主流を占め、また身部が幅広のタイプが一定量存在する。また鉄鏃は無茎三角形式が主流を占め独自の型式変化をなし、瀬戸内地域とは一線を画す。舶載鉄器が多く認められるのも当地の特徴で、中期からの舶載鑄造鉄斧のほか、大型の刀剣類が墳墓副葬品として目立つ。特に大刀は現状では環頭を裁断した大刀のみで占められ、同じ舶載大型武器である素環頭刀の出土が目立つ丹後・北陸とは異なる様相をみせる。

3. 山陰における弥生時代後期の社会変化

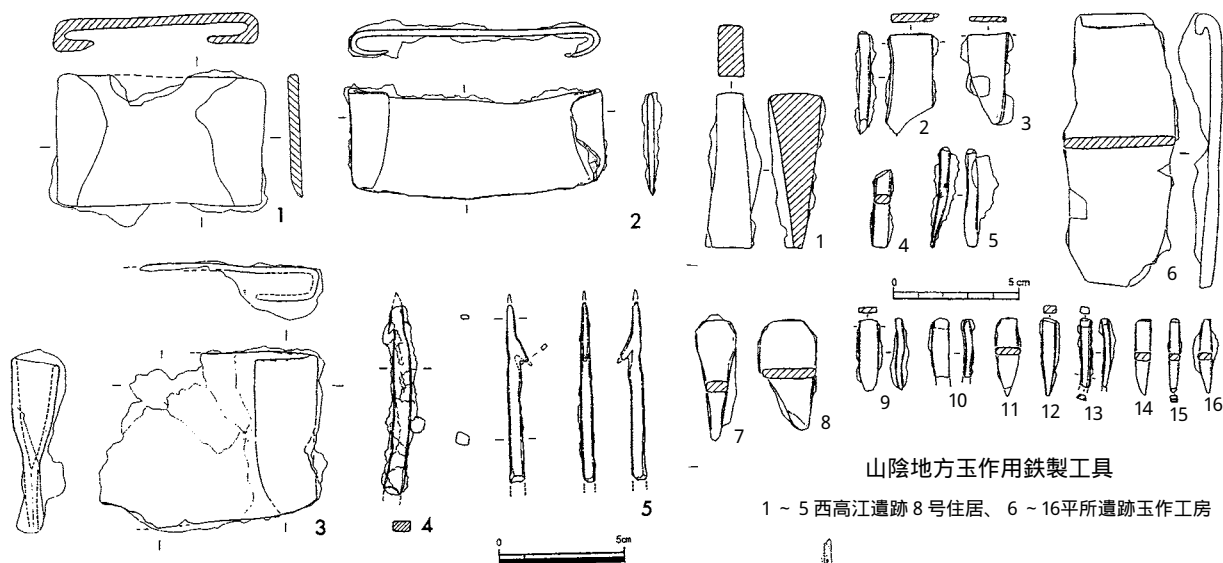
山陰では縄文時代後期以降、打製石器の主たる素材としてサヌカイトが安定して供給されており、弥生時代中期後葉段階でもかなりの比率を占めている。弥生時代中期においては、このサヌカイトを介した瀬戸内との交渉が唯一安定した領域外との地域間交渉であった。弥生時代後期の急速な鉄器の普及は、こうした縄文時代後期以来の当地の安定した物流システムを崩壊させ、当地の集落成員の外部領域観を大きく変質させたものと考えられ、当地の土器様相が中期の瀬戸内的な様相から脱却し、独自の様式を成立させていく要因もここに求められる。この時期に出雲地方では多くの高地性集落が出現する。山陰で鉄器が多量に出土する集落は、内海やラグーンを見下ろす丘陵上に立地するものが多く、外部との交易に有利な場所に集落を構え、鉄をはじめとする必需物資の流通を差配しようとした意図を読みとることができる。このように当地の高地性集落の出現は、中期段階の安定した流通関係・外部領域観が崩壊し、新たなシステム・地域社会が再編されるプロセスにおける不安定な状況を反映しているものと想定される。こうした状況下で地域単位の求心力が求められるようになり、その脈絡において西谷3号墓のような巨大首長墓の出現を理解することが可能となる。



山陰地方の弥生時代鉄器出土遺跡分布図（高尾 2001）

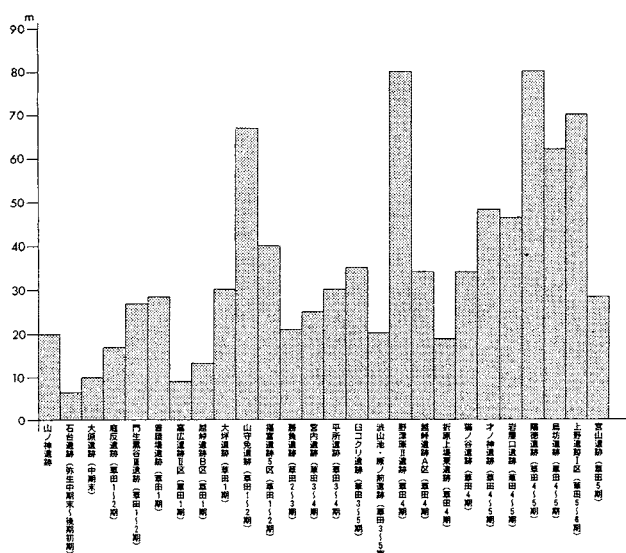


弥生中期の鉄器
(1 島根・西川津、2 島根・国竹、3・5 鳥取・長山馬籠、4 鳥取・青谷上寺地)

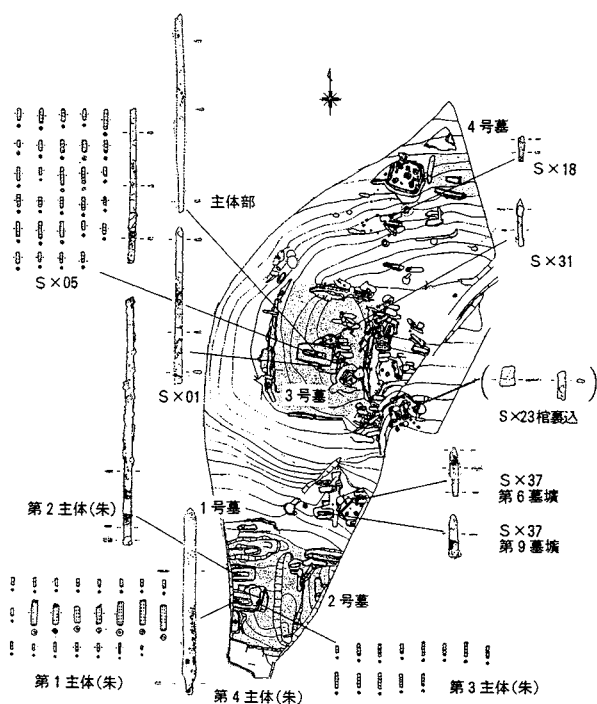


山陰地方に特徴的な鉄器群

1 島根・竹ヶ崎、2・5 島根・青谷上寺地、3 鳥取・妻木晩田
4 鳥橋・沖文



出雲における弥生時代中期末～後期末の集落の立地 (単位m) (池淵 1998)



山陰の鉄器を副葬する方形台状墓 (宮内第1遺跡)

山陰地方鉄器多量出土集落の立地



島根・塩津遺跡群



鳥取・妻木晩田遺跡



京都府北部(丹後地域)における 鉄器の導入と社会の変化

野島 永(財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)

1. 弥生時代中期 - 集落出土の鉄器と玉作り -

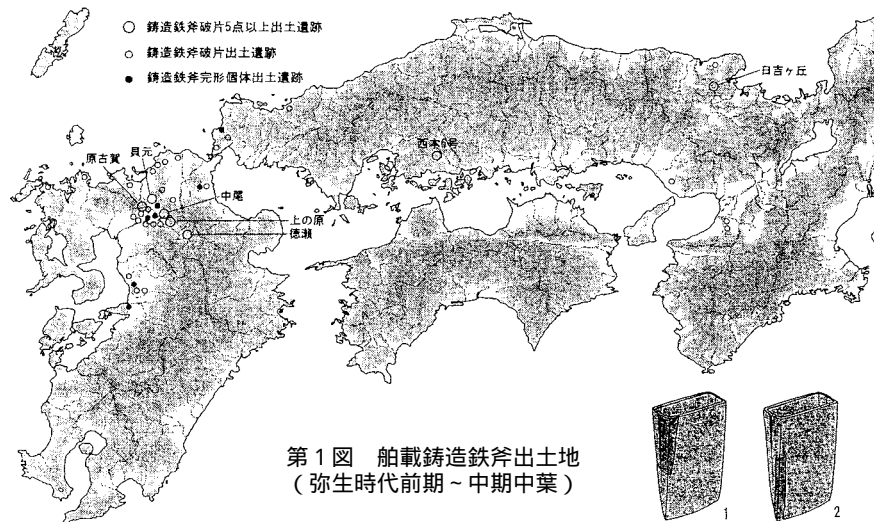
京都府北部では、弥生時代中期に中郡峰山町途中ヶ丘遺跡や同町扇谷遺跡・舞鶴市桑飼上遺跡などから、鉄鏃や袋状鉄斧・板状の利器などの出土が報告されている。扇谷遺跡では、中期前葉の鍛冶滓が出土していることから、この地域における弥生時代中期の鉄器生産を考えてもおかしくはない。

与謝郡加悦町日吉ヶ丘遺跡では、中期中葉に遡る鍛造鉄器や鑄造鉄器が出土した。鑄造鉄器の破片は、前漢の鑄造鉄斧(鏃)や一字形の鋤同様、袋部空隙が刃部付近まで造形されるもので、漢の鑄造技術で作られたものであろう。中期後葉の竹野郡弥栄町奈具岡遺跡には、鑄鉄を加熱することによって個体のまま酸化させて脱炭し、鉄の組織を強靱な鋼に変化させた鉄片も認められ、当時の漢の先端技術で作られた鉄素材の破片も入手していたことがわかる。奈具岡遺跡は、玉作りを専業とする中期後葉の集落で、七四基もの竪穴遺構や竪穴住居跡が検出された。碧玉・緑色凝灰岩や水晶など、膨大な石材群とともに、石錐・石鋸・筋砥石、鉄製工具などの加工生産具も出土し、原石から製品までの製作工程が明らかになった。玉作りに使われた鉄製工具とその未製品の多量出土と韃羽口や鍛冶炉の存在から、玉作用の鉄製工具の加工も行われていたことがわかった。多くの人々が従事したこの装身具生産であったが、その製品は朝鮮半島や北部九州への贈答品として生産され、鉄資源と交換された可能性も考慮すべきであろう。

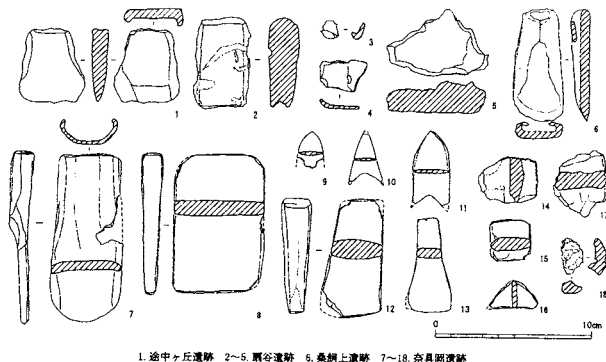
2. 弥生時代後期 - 墳墓出土鉄器とその特徴 -

日吉ヶ丘遺跡にみられた貼石方形墳丘墓は中期後葉にさかんに造られたが、後期には影をひそめる。後期前半、丘陵を区画・整形することによって長方形平坦面を確保して埋葬を継続させつつ、連接した台状墓が丘陵全体を覆っていくようになる。このような墓地の埋葬手順は、韓国の慶尚南道金海市良洞里墳墓群の墓壇配置にも類似しており、後期前葉においては朝鮮半島南東部からの墓制の影響を窺うことができる。しかし後期中葉以降、丘陵上に独立した方形の墳丘と墳頂平坦面をもつ台状墓が造営される。方形墳丘墓が卓越する近江や東海地方との結びつきが強くなることが、独立した方形台状墓を成立させたのかもしれない。丹後地域の方形台状墓は、その中心に大形化した墓壇を穿ち、鉄剣一振りか二振り、あるいは鉋などの鉄製工具を副葬する場合が多い。山陰地方東部や北陸地方東南部では、京都府北部同様に、方形台状の墳丘に鉄製刀剣類を副葬するものがある。山陰地方や北陸地方は、四隅突出形墳丘墓が展開していく地域であるが、むしろこの方形台状墓に鉄製刀剣類を頂点とした鉄器副葬が顕著にみられる傾向があり、近畿地方北部との関係を窺うこともできよう。

また一方で、与謝郡岩滝町大風呂南一号墓から出土した鉄剣には、短い茎部をもち、刃部部に双孔を穿つ列島独自のものがある。このような刃部双孔の鉄剣は、近畿地方よりもむしろ北部九州やその周辺、あるいは東海・関東地方にみられるものである。東方諸地域との交流を示唆する副葬鉄器といえる。丹後地域の首長達は、そのリーダー・シップを示すために素環頭鉄刀や鉄剣、各種釧などを入手し、装身具を大量に生産した。彼らは、日本海側沿岸の諸地域と連携し、それらの地域と近畿・東海地方との間にあって、貴重財の仲介的な交易に目をつけたと考えることもできそうである。

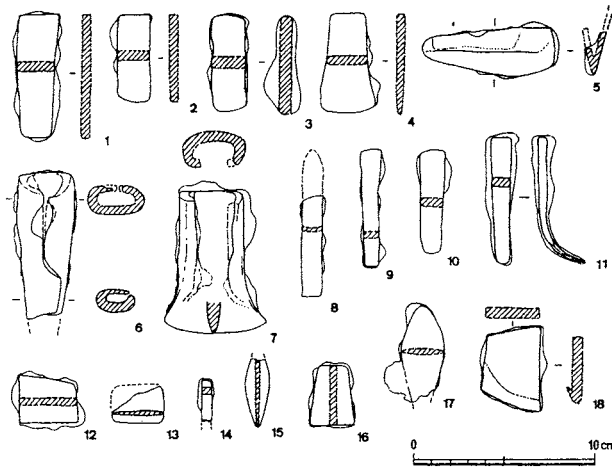


第1図 舶載鑄造鉄斧出土地
(弥生時代前期～中期中葉)

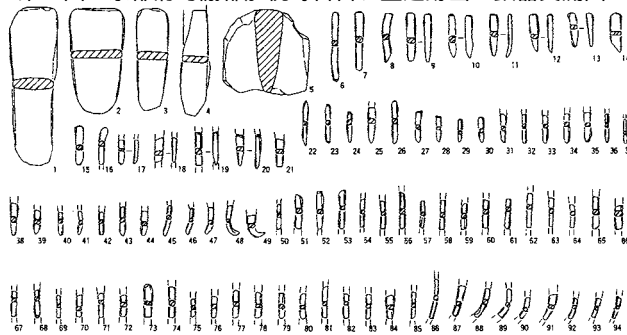


1. 途中ヶ丘遺跡 2～5. 瀬谷遺跡 6. 桑畑上遺跡 7～18. 奈具岡遺跡

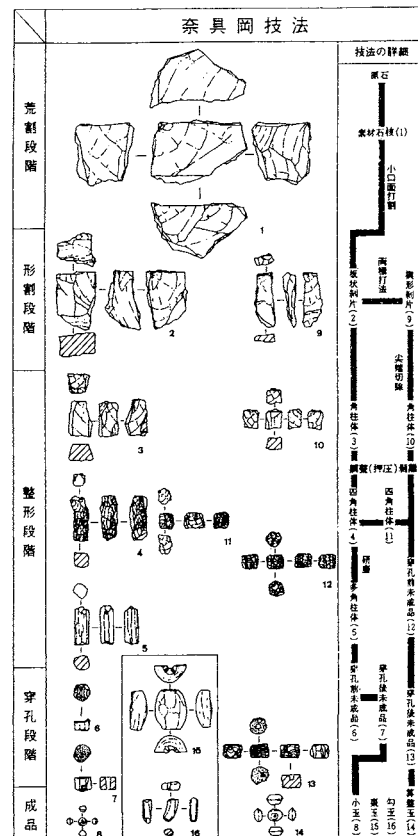
第2図 丹後地域集落出土鉄器の類例 (弥生時代前期～中期)



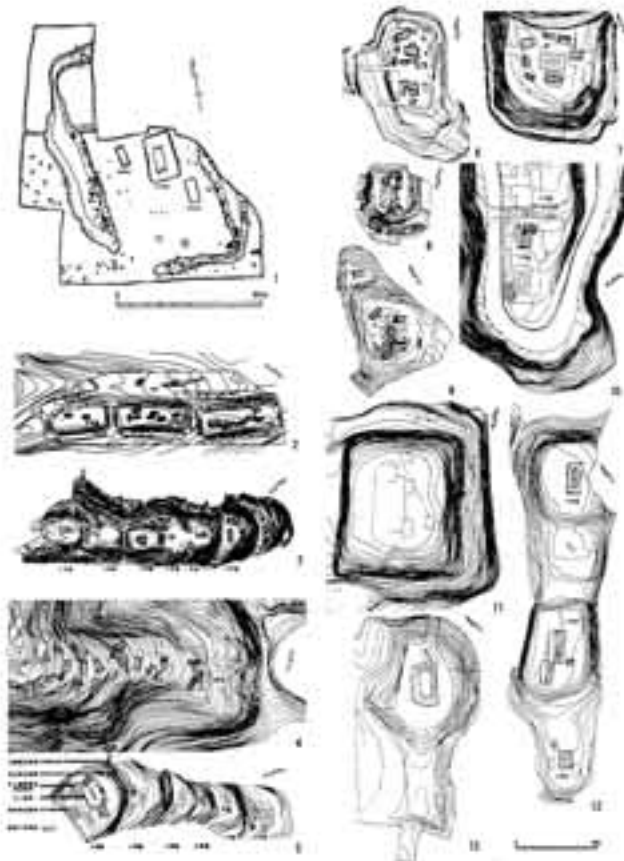
第3図 京都府与謝郡加悦町日吉ヶ丘遺跡出土鉄器実測図



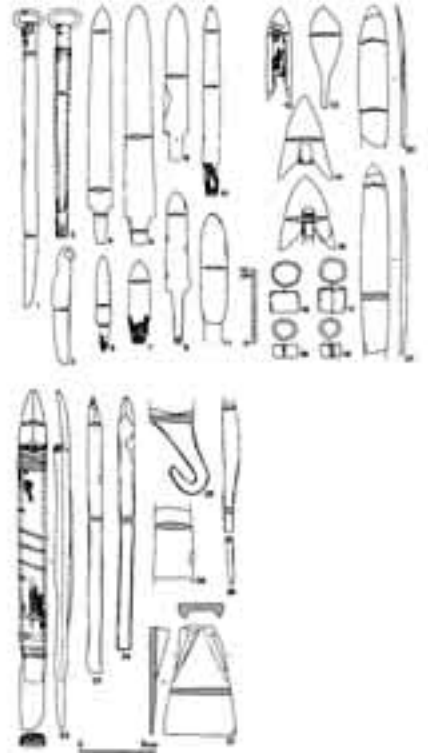
第5図 奈具岡遺跡における玉作専用鉄製工具類



第4図 奈具岡遺跡における玉製作工程 (水晶)

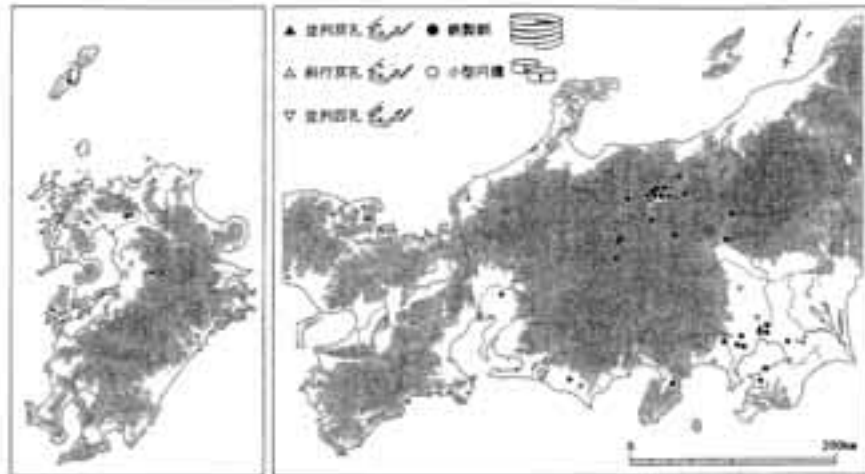


第6図 丹後地域の墳丘墓

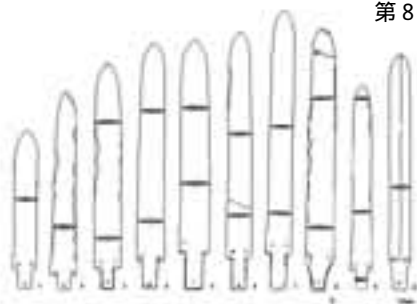


第7図 丹後・但馬地域における墳墓出土副葬鉄器

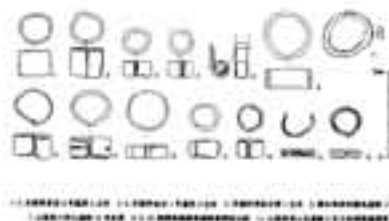
1. 中継(200) 2. 奈良 3. 丹波 4. 近江(1000) 5. 三河(神志) 6. 新羅(1000) 7. 西宮(1000) 8. 奈良 9. 丹波 10. 近江(1000) 11. 三河(神志) 12. 丹波 13. 奈良



第8図 刃関双孔鉄剣と鉄釧・鉄製小型円環出土地 (弥生時代後期)



第9図 近畿地方の刃関双孔鉄剣



第10図 鉄製小型円環(1~4・6・7) と銅製小型円環(8~14)



第11図 鉄剣の再加工 (中期後半)

第12図 銅釧および鉄釧の再加工



石川県における鉄器の導入と社会の変化

林 大智（調査第1課）

今回の報告では、県内において弥生時代から古墳時代前期に、鉄器の普及と所有がどのように進行し、その結果、集落や墳墓にどのような変化が表れたのかということを中心に考えた。

鉄器導入の画期と導入ルート

県内では弥生時代中期に鉄器の導入が開始され、定量の鉄器導入が開始される弥生時代中期後半、ほぼ全ての器種が出揃うと共に簡易な鍛冶技術が普及し、小型で地金の薄い集落出土鉄器と、大型で重厚な墳墓出土鉄器の差異が顕在化する弥生時代後期後半、鉄器出土量の急増に対応するように高温加熱処理による鍛冶技術が定着し、副葬品の主体が鉄剣から素環頭大刀・刀子や鉄刀に転換する弥生時代終末期、新たな鍛冶技術が導入されることで集落から出土する鉄器量が減少し、鉄器組成の中で農具の占める比率が高くなる古墳時代前期初頭に画期が認められる。鉄器や鍛冶技術の導入ルートについては、日本海沿岸地域の交流によりもたらされた可能性が高い。

その他の道具の変遷

石器・木製品などの変遷にもいくつかの画期が存在し、鉄器や鍛冶技術の画期と密接に関連していることが伺える。具体的には、砥石や鉄斧柄など鉄器の導入を示す資料が出現する弥生時代中期後半と、鉄器の普及を示す資料が定着し、木製農具の出土量が増加すると共に地域色が顕在化する弥生時代後期後半、玉作りなどで集中的な生産が開始される弥生時代終末期に画期が認められる。また、玉作り遺跡が急減することなど古墳時代前期初頭にも大きな変化が認められる。

日本海沿岸地域の交流

道具やその生産技術・体制が変遷する背景には、日本海沿岸地域における交流の変化が大きな要因となった可能性が高い。この地域では弥生時代中期後半に遠隔地間交流が顕在化し、道具変遷の大きな画期である弥生時代後期後半～終末期には活発な交流が行われ、墳丘墓・舶載鉄器・木製容器など首長層に付随するような道具の交流も行われた（第1・3図参照）。また、玉製品は舶載鉄器の主な交換財として用いられた可能性が高い（第1・2図参照）。

鉄器の導入と社会の変化

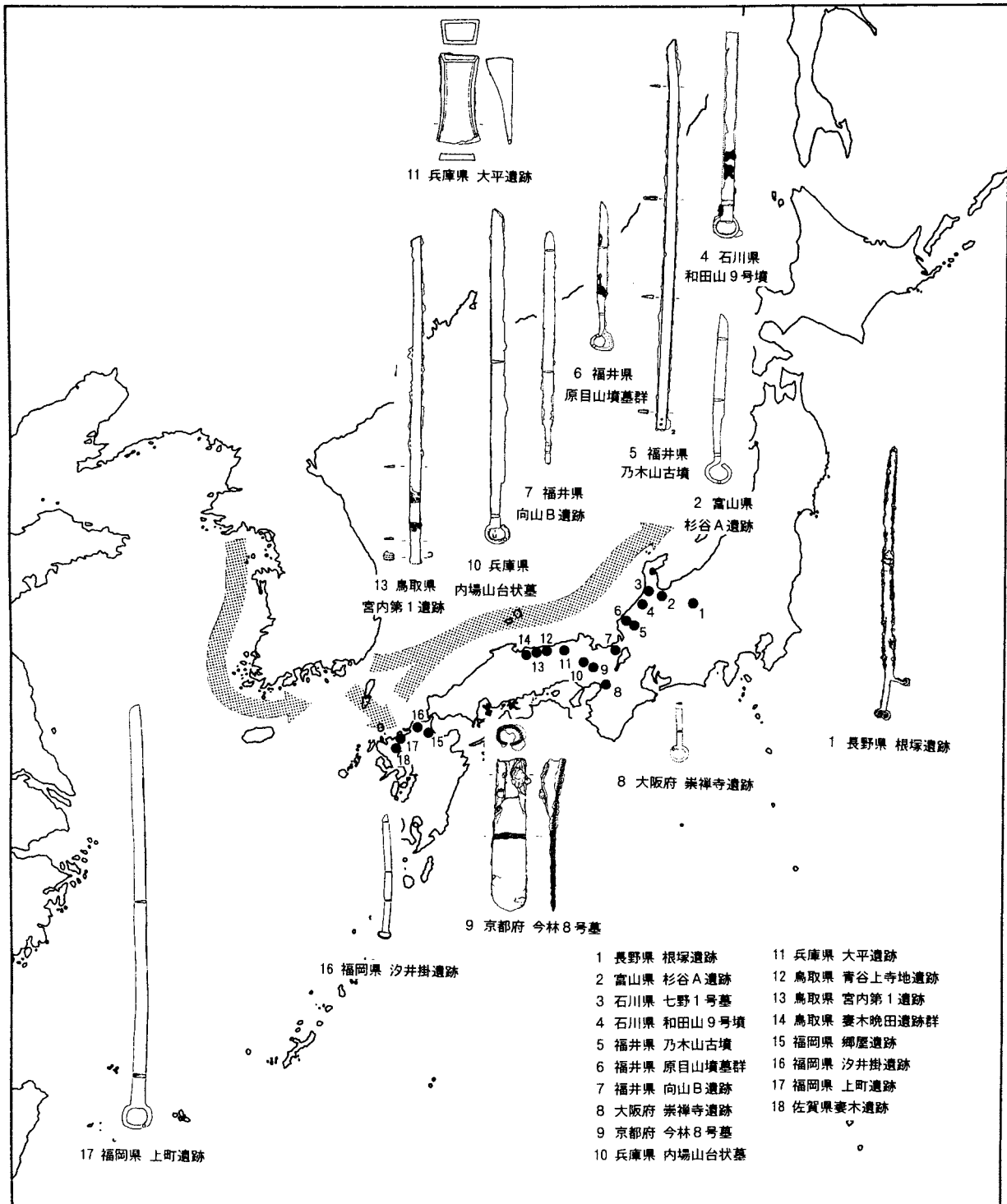
日本海沿岸地域間における交流の変化や道具の変遷は、集落・墳墓の動向にも大きな影響を及ぼしたと思われる。集落・墳墓の動向をまとめると、拠点集落が衰退して近隣に中・小集落が出現する弥生時代中期後半、集落が急増すると共に手工業生産を集中的に行う集落も出現し、鉄器を副葬する墳丘墓が出現する弥生時代後期後半、首長居館の出現など集落間に明瞭な格差が表れ、前方後円墳や前方後方墳が出現する古墳時代前期初頭・前半に画期が認められる（第4図参照）。

まとめ

以上のことをまとめると、鉄器や鍛冶技術の変遷は、弥生時代中期後半と後期後半に大きな画期が認められる。この画期は鉄器以外の道具の変遷や、日本海沿岸地域における交流の変化とも連動しており、交流の変化が様々な道具を変遷させる大きな要因となっていた可能性が高い。それらのなかでも、工具の鉄器化や交流に伴う製作技術の伝達は、手工業生産体制の変化を引き起こした可能性が高く、この生産体制の変化や集落と墳墓における鉄器の差異、すなわち首長層における遠隔地間交流の掌握が、階層化の進行を促進させ、古墳時代に向けた社会変化の大きな要因となったと考えられる。

【引用・参考文献】

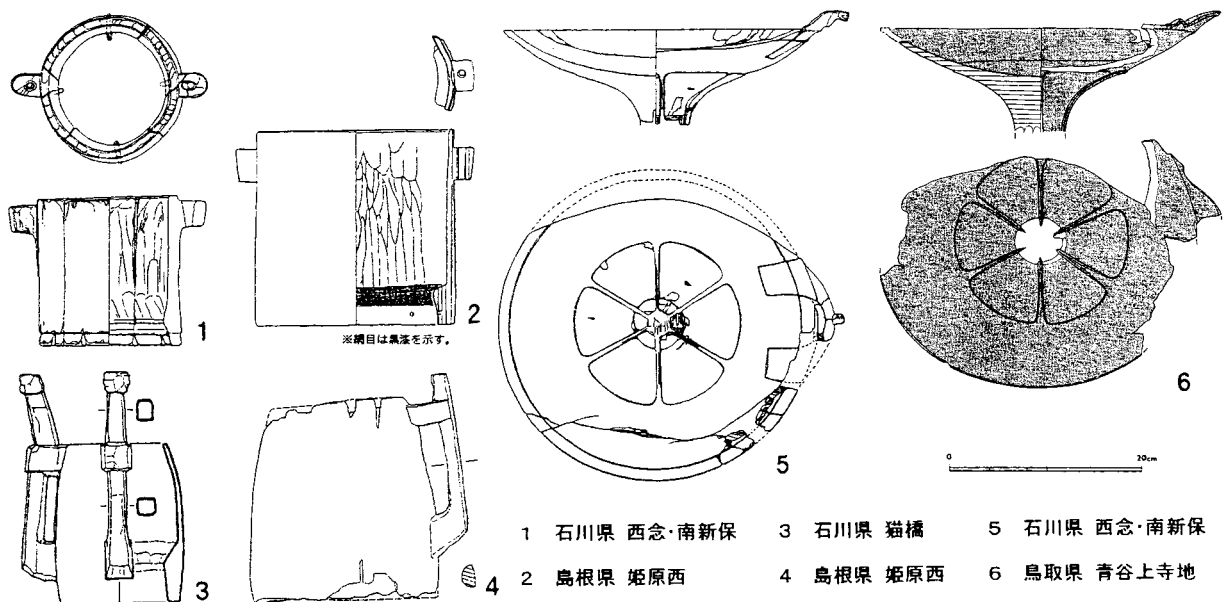
- 河村好光 1986 「玉生産の展開と流通」『岩波講座日本考古学』3 生産と流通 岩波書店
 木田 清 1997 「第6章 古墳時代以前の集落」『加賀 能美古墳群』寺井町教育委員会
 林 大智・佐々木勝 2001 「北陸南西部地域における弥生時代の鉄製品」『補遺編』
 石川県考古資料調査・集成事業報告書 石川考古学研究会



第1図 日本海沿岸地域周辺における弥生時代後期後半～終末期の主な船載鉄器



















第2図 弥生時代後期の玉作り遺跡の分布〔河村1986〕



第3図 弥生時代後期の北陸・山陰地域の木製容器 (S = 1 / 8)

⊗は比高数 m、○は平地立地比高 0 m

時期	地域	南加賀	北加賀	能登	計	継続率(%)	
弥生中期		0		8 	4	12	25
猫橋		1		4 	1	6	83
法仏		2		17 	14	33	48
月影		6		19 	13	38	26
白江		5		11 	8	24	50
古府クルビ		3		12 	5	20	20

第4図 弥生から古墳時代村落の消長とその立地〔木田1997〕



福井県の鉄製品の様相

- 北陸地域の墳墓資料を中心として -

佐々木 勝（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）

北陸地域は旧国単位で若狭から越後までと広域である。この中において広域流通と地域圏の形成を墳墓における鉄製品の副葬からせまってみる。

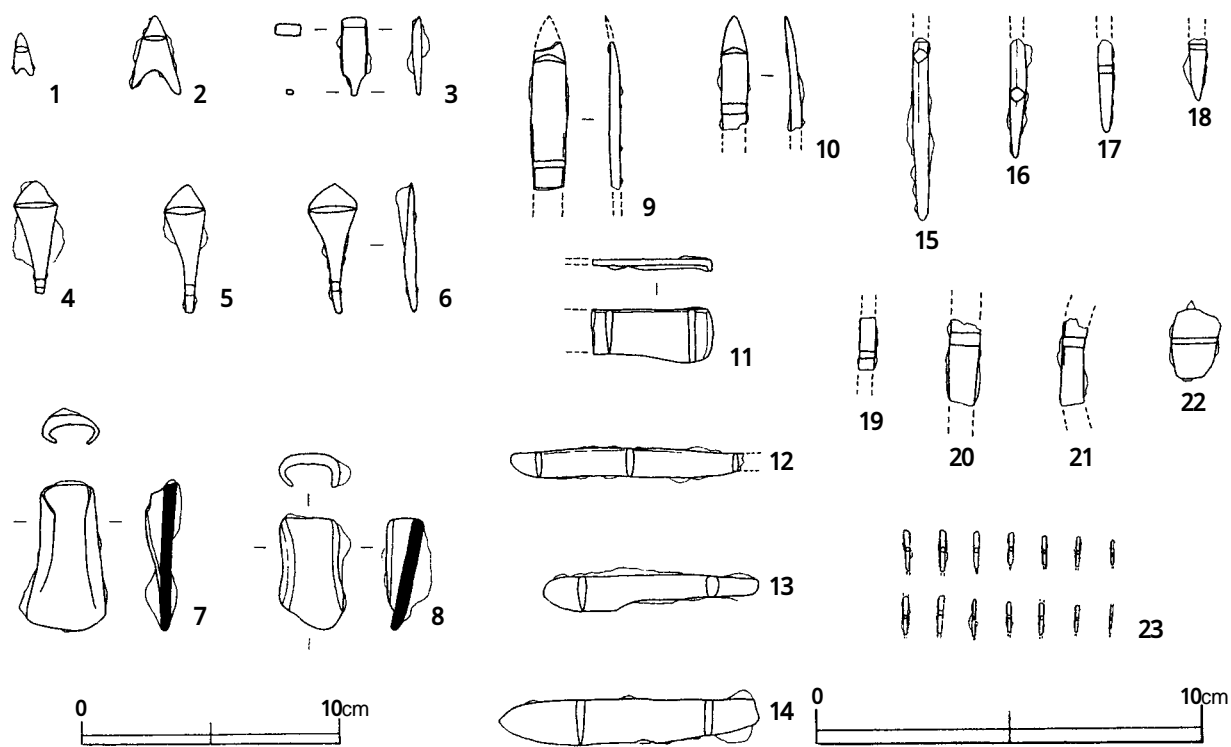
弥生時代中期末には拠点集落が解体していく。この時期に北陸地域に鉄製品がもたらされており、凹線文系土器の波及の影には、物資や情報の広域伝達ネットワークの形成があり、弥生時代後期から古墳時代前期に向けて集落の機能や階層分化が進行していくと考えられる。

集落で多量に鉄製品の出土がみられる弥生時代後期後半以降、丘陵上に大型の墳丘墓の造営が開始される。これは拠点集落解体後、階層分化が進行したため、首長墓が出現し、広域な流通ネットワークを通してもたらされた大型武器類の副葬が開始される。時期的な変遷として弥生時代後期後半は鉄剣の副葬が顕著であり、弥生時代終末期になると主に鉄刀、素環頭鉄刀・刀子に転換する。このことは三韓地域における墳墓副葬品が、2世紀中頃に鉄矛・短剣から長剣・素環頭鉄刀に転換し、埋葬施設が木棺から木槨に変化することから、三韓諸国の影響を受けていると考えられる。また、乃木山古墳（弥生時代終末～古墳時代前期）は第1埋葬施設が木槨墓である。越前では素環頭裁断太刀の副葬がみられ、素環頭太刀は漢代において実用戦闘武器でありなおかつ身分表象の道具であり、その環頭を切断することは漢の風習にはない行為である。その説明は、乃木山古墳にみられるような木製の柄を付けることによって、倭的な使用・副葬方法にかえ、のちの前期古墳につながる流れとなる。またの着柄された鉄刀の柄の1つは剣でもう1つは刀の柄をつけている。このような現象があるものの、素環頭部を裁断していない鉄刀・鉄剣も同時に副葬されていることも興味深いことである。この素環頭裁断太刀は山陰から但馬にかけてもみられ、日本海沿岸域の交流を考えるうえで重要である。また、弥生時代終末期の鉄刀・素環頭鉄刀の副葬は福井県嶺北・加賀・富山県西部にかけて顕著に見られ本地域より東の地域（越後・信濃・北関東・南関東）は鉄剣が副葬され鉄刀・素環頭鉄刀はみられない。このことから鉄製品の副葬風習や流通に関し志向性や選択性がうかがえる。

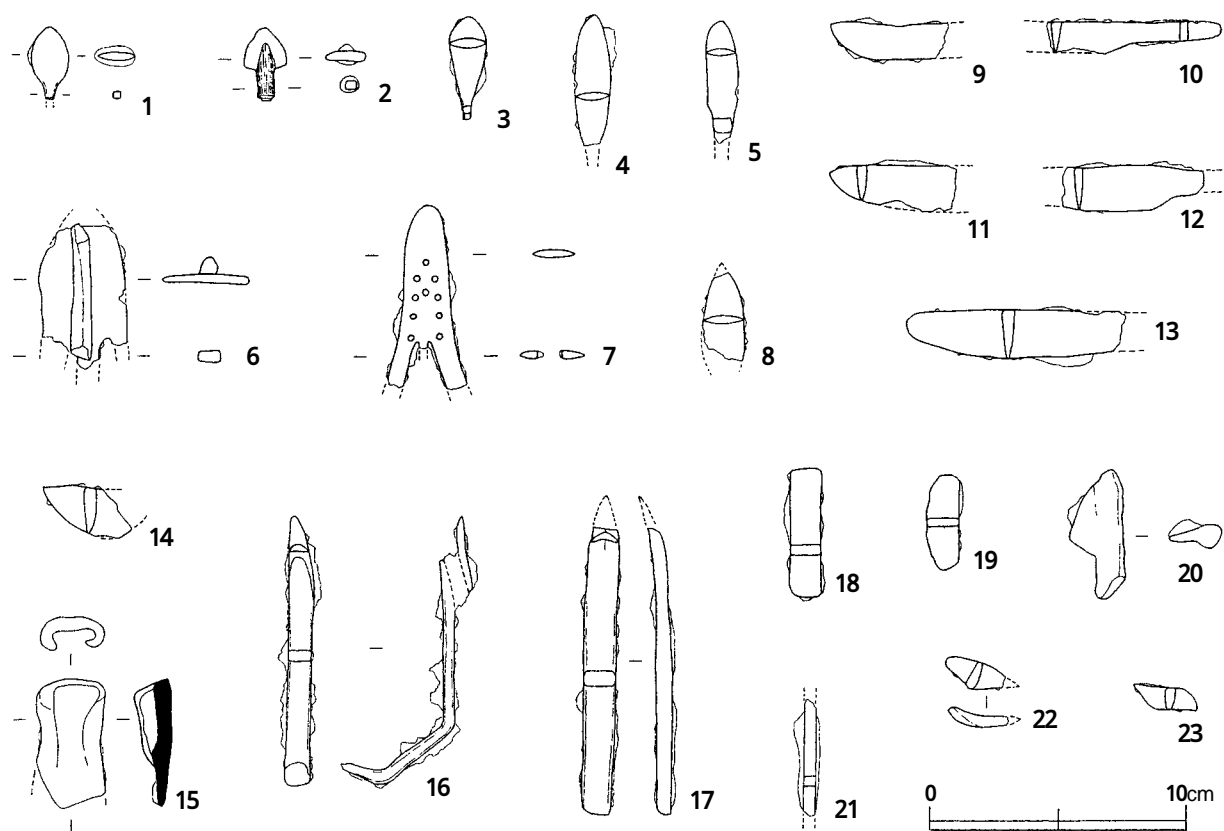
素材については吉原七ツ塚墳墓群・杉谷墳墓群から用途不明の鉄片が出土しており他に器種を確定することができないことから、素材と考えることが妥当であり、その流通に関しての好例である。また、この素材は非常に薄く小型であることからここから造り出される製品はおのずと制約を受け、集落出土鉄製品や鉄製品製作技術を考える上での重要な視点となると考えられる。

このように、墳墓出土鉄製品から大型武器類のほとんどが舶載品と考えられ、集落出土鉄製品は素材からも小型で薄造りであるといえ、副葬用の大型武器類と集落での実用品との格差があるといえる。

鉄素材や大型武器類は、北陸という地域で産出及び生産することはできない。その結果鉄製品が普及しはじめる弥生時代中期末以降、社会的生産 消費体系から越地域的生産 消費体系へと変化して、広域な物資や情報の流通・伝達ネットワークが形成されるものと考えられる。この中で弥生時代終末期には、福井県嶺北・加賀・富山県西部域で、土器文化圏においては月影式、手工業生産では緑色凝灰岩を用いた玉作り、墳墓形態は方形周溝墓・台状墓また墓制の主流にはなりえなかったが北陸型四隅突出型墳丘墓、鉄製品副葬風習では鉄刀、素環頭鉄刀・刀子がほぼ同一の分布圏を持ちさまざまな様相から地域圏の形成がみてとれる。



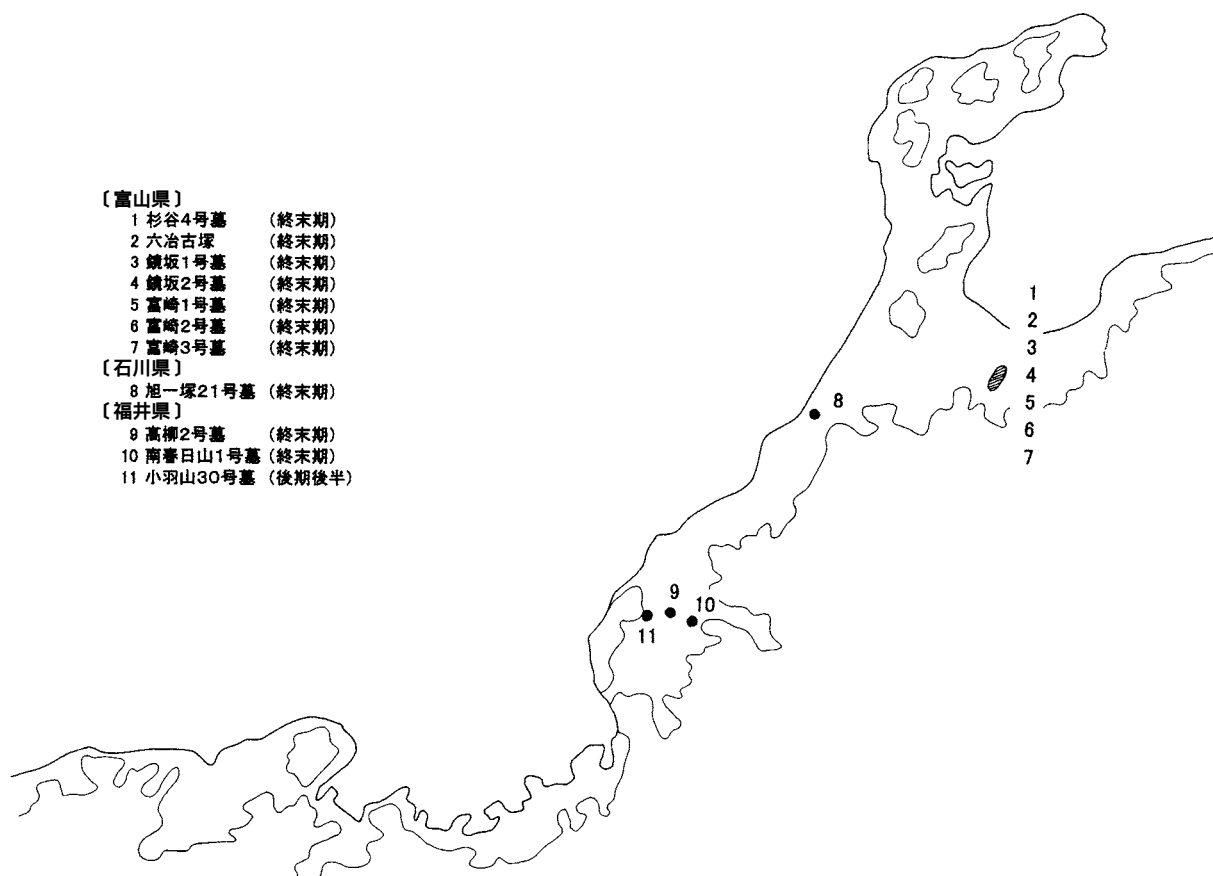
1～6 鉄鐮 7・8 袋状鉄斧 9・10 ヤリガンナ 11 鉄鎌 12～14 刀子 15～18 調整工具 19～22 不明鉄製品（素材？） 23 鉄針
林・藤島（泉田）遺跡出土鉄製品〔弥生時代後期後半〕（S = 1 / 3 23のみ S = 1 / 2）



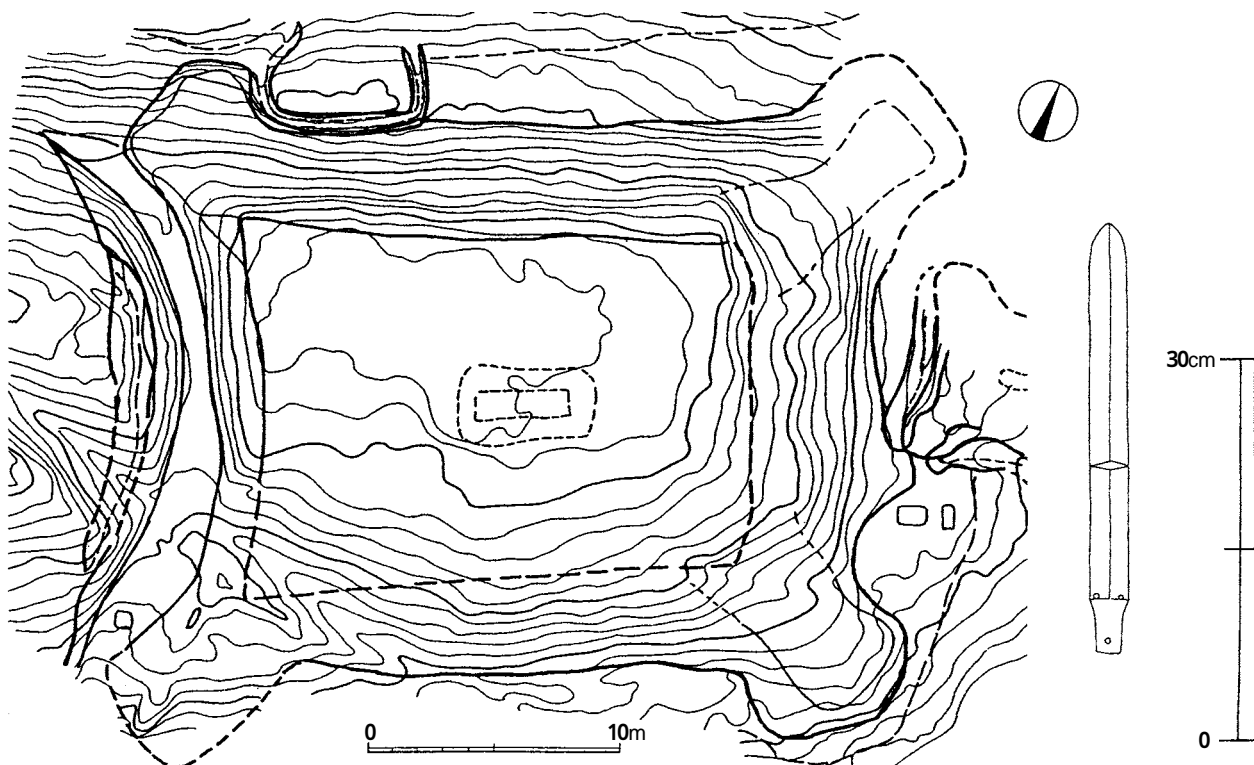
1～8 鉄鐮 9～14 刀子 15 袋状鉄斧 16・17 ヤリガンナ 18～21 不明鉄製品（素材？） 22・23 切片？
柴崎遺跡出土鉄製品〔弥生時代終末期〕（S = 1 / 3）



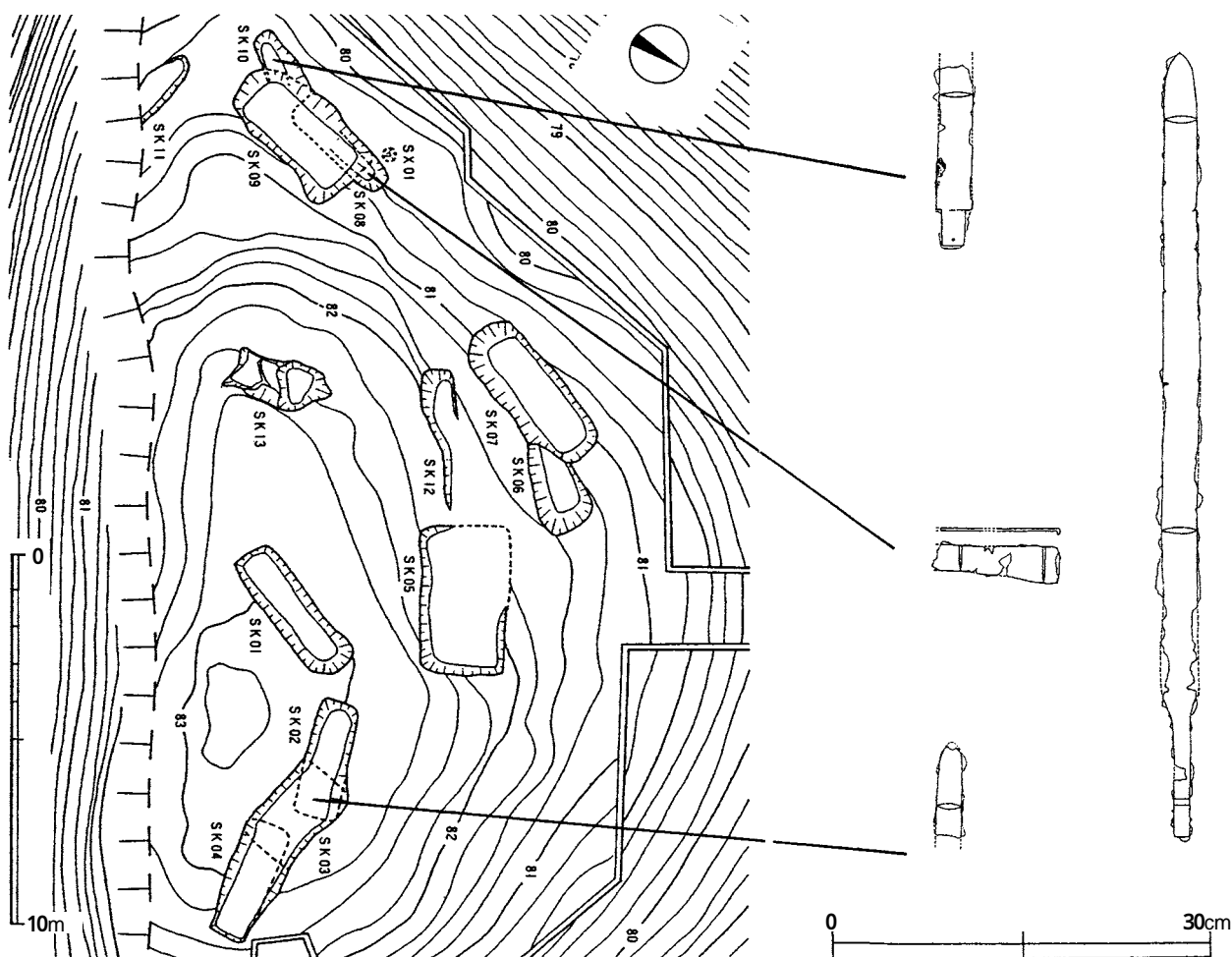
北陸地域における弥生時代鉄製品出土墳墓の分布図



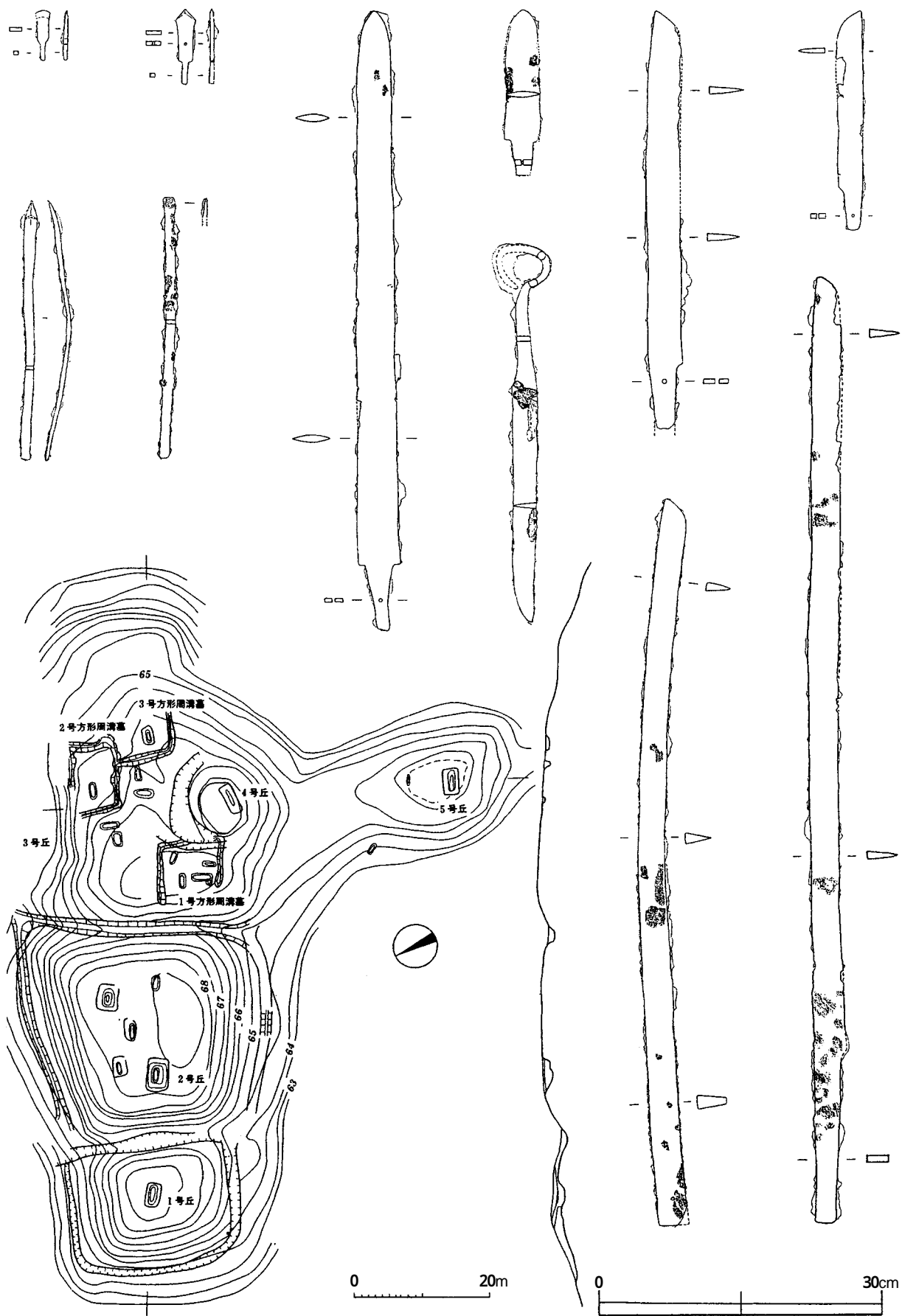
北陸地域における四隅突出型墳丘墓の分布図



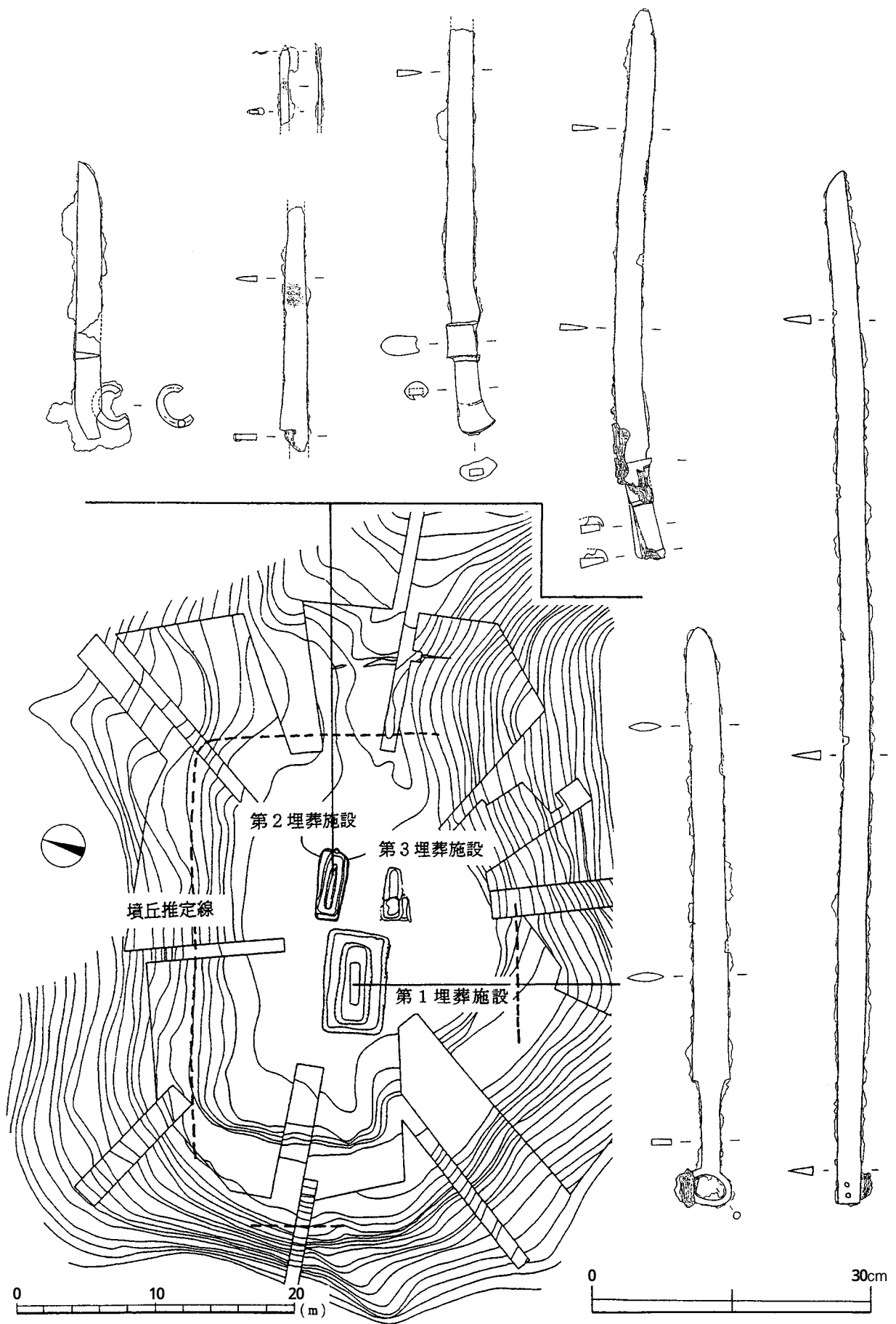
小羽山30号墓【古川1997より一部改編】(遺構図: S = 1 / 300 鉄製品: S = 1 / 6)



向山B遺跡【網谷1991より一部改編】(遺構図: S = 1 / 200 鉄製品: S = 1 / 6)



原目山墳墓群【福井市1990より一部改編】(遺構図：S = 1 / 800 鉄製品：S = 1 / 6)



乃木山古墳【松井1997より一部改編】(遺構図：S = 1 / 400 鉄製品：S = 1 / 6)



裏山遺跡の鉄器

小池義人（新潟県埋蔵文化財調査事業団）

A．新潟県域の弥生時代の鉄器

現在40点前後の鉄器・素材等の出土が知られる。石川県域に比較して大きな開きがあるのは、そもそも弥生集落の調査例が乏しいことに加え、北九州・山陰との交易という鉄器獲得手段にあって西から東への漸減的傾向に沿うものであろう。

出土の分布は、いわゆる高地性集落と概ね重複しており、これらの遺跡が消費地であるとともに、鉄器の流通にも一定の役割を担っていると推測される。鉄器の帰属時期については、中期・後期前半に遡る確実な例は存在せず、普及が明確になるのは、高地性集落が形成される時期と重なる後期後半以降である。後期の遺跡は、程度の差はあれ玉作の遺跡であることが通有で、新潟県域においても鉄器は玉作技術の変化と密接な関係にあると言える。

頸城地方の3遺跡（裏山・斐太・下馬場）を除けば、鉄製品の出土はいずれも散発的である。県北部にある新津市八幡山遺跡は、畿内的な大規模高地性集落であるにもかかわらず、方形周溝墓の刃関双孔鉄剣1点と竪穴の鉄鏃1点に限られ、鉄の保有状況は、頸城とそれ以外の地域とでは対照的である。ただし、頸城以外は散発的であるとはいえ、和島村姥ヶ入南遺跡の大型の袋状鉄斧（長さ15.6cm）、三条市経塚山遺跡の板状鉄斧、前述の八幡山遺跡の鉄剣のように、舶載と見られるものや、特定の地域に分布するものが含まれ、北に向かうにしたがって、数が現象するという単純な図式では理解できないものがある。なお、裏山遺跡の報告書における、鉄製品集成の不備と遺漏は、本集会の発表レジュメ集で概ね修正させていただいたので、詳細はこれを参照いただきたい。

B．裏山遺跡の鉄器と玉

新潟県域で、小型の鉄器と鋤先が共出している例は裏山遺跡のみで、この点では山陰・北陸南西部との共通性が認められる。鋤先は2タイプ計6点があり、1遺跡の数量としては突出している。ただし、鉄板の厚さは1mm前後と薄く、刃幅も山陰・北部九州のものに比較してかなり小さく、鋤先としてはやや異様なものである。北陸での生産、あるいは再加工の可能性もあろう。有孔の鉄鏃は中部高地の石鏃と関連性のあるものであろうが、信州系の土器は1点のみであり、鉄器を多く保有する長野県域との関係は土器の上からは窺えない。また、この形態は山陰にも存在するものである。

8基の竪穴からなる小集落としては鋤先の量が突出していること、鉄器関連の遺物として70点あまりの砥石と165点の軽石製研磨具があることからすると、鉄器は集落の消費財のみではなく、保守工具をも含めて集散を目的に一時保有された可能性が高いと考えている。

玉関係の遺物は、管玉の製品・研磨途上品・柱状剥片等と、ヒスイの角礫塊・半製品などがあるものの、碎片が皆無である。研磨・穿孔作業のみが行われたと考えることは否定できないが、一連の玉作工程の中で剥離調整作業が欠落するのは不合理であり、裏山では積極的に玉作を認めたい。玉の石材がない高田平野周辺では、地域完結的な玉生産を想定する富山の論考[富山2001]とは相違して、素材や半製品を二次的に生産する玉作遺跡と、これらを集散する集落が存在することになる。

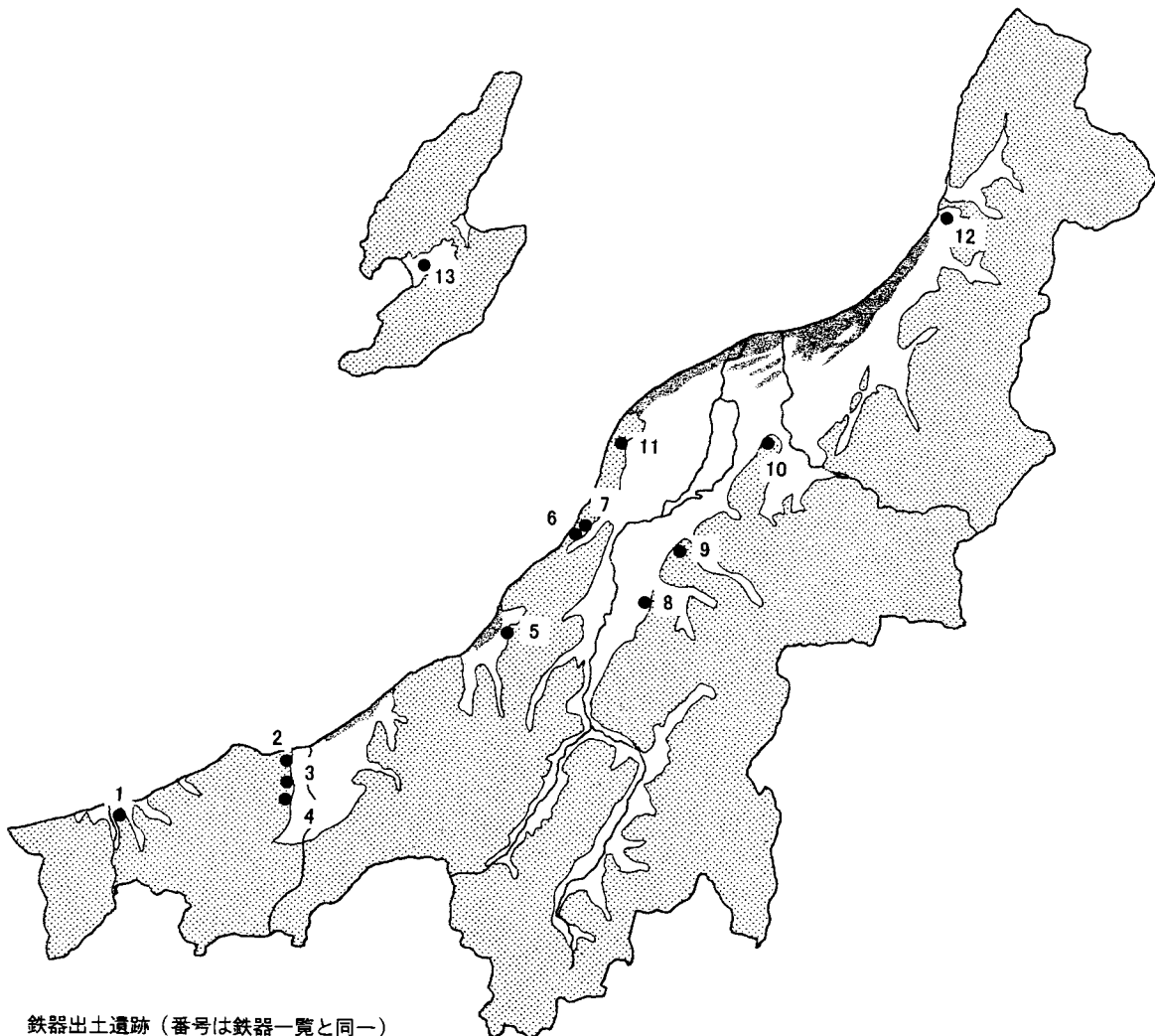
鉄と玉は地域内で求められない物資であり、少ない資料からの推測ではあるが、高地性集落というランドマークが、集散地としてこれらの流通に深く関与していたと思われる。

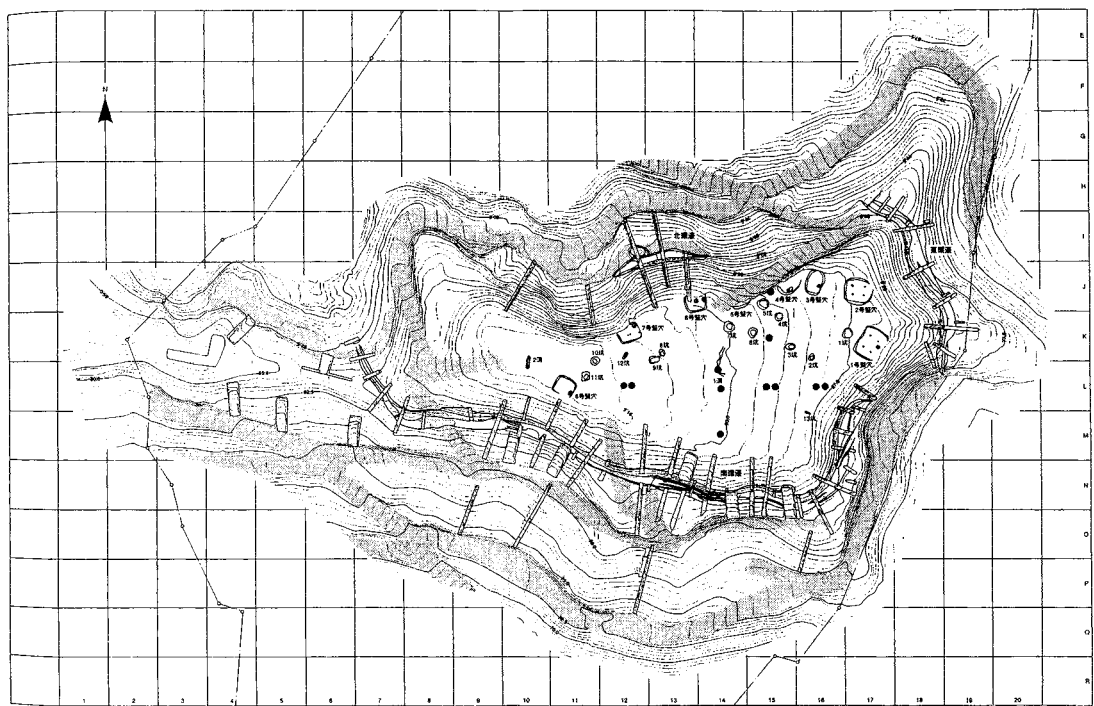
新潟県域における弥生時代の鉄器一覧（古墳前期までの時期幅を有するものを含む）

	遺 跡 名	所 在 地	出 土 地 点	鉄器種別・数量	時 期
1	後生山遺跡	糸魚川市	1号住居跡	「刀子」1	後期
2	裏山遺跡	上越市	包含層 1号溝	鋤先5・鉄鏃3・ヤリガンナ1・不明1 鋤先1	後期後半 //
3	下馬場遺跡	上越市	1号竪穴 2・6・7号竪穴 13号竪穴	鉄鏃1 不明鉄片各1 鏃4?（鏃着1塊）	後期後半 // //
4	斐太遺跡 （上ノ平・矢代山）	新井市	第1号住居址 第2号住居址 第24号住居址	「刀子」1・「釘片」1 「刀子残欠」1 「鉄片」1	後期後半 後期後半 後期終末～古墳初頭
5	西谷遺跡	刈羽郡刈羽村	環濠	「不明」1	後期後半
6	姥ヶ入南遺跡	三島郡和島村	墳墓	「鉄剣」1・「鉄斧」1	後期終末
7	奈良崎遺跡	三島郡和島村	竪穴 溝	不明1 鑿状鉄製品?1	後期後半～終末 後期後半～古墳前期
8	横山遺跡	長岡市	不明	「鉄製品の小片」1	後期終末～古墳初頭
9	経塚山遺跡	三条市	3号住居址	「板状鉄斧」1	後期後半
10	八幡山遺跡	新津市	2号方形周溝墓主体部 S I 13号住居址	「鉄剣」1 「鉄鏃」1	天王山式 後期
11	山谷古墳	西蒲原郡巻町	小マウンド1盛土	「袋状鉄斧」1・「刀子」1	後期後半～古墳前期
12	砂山遺跡	村上市	不明	「鉄斧」1・「刀子」2 ※鉄斧は関雅之氏の採集物 ※小片・上原1972では鉄器の記述はなし ※橋本1997では「鑿」の記述あり	天王山式主体
13	千種遺跡	佐渡郡金井町	不明	「刀子」1	後期終末～古墳初

時期と土器編年の対応

後期前半：猫橋式（西念・南新保Ⅳの2期） 後期後半：法仏式（//3期）
後期終末：月影式（//4期） 古墳初頭：白江式（5期）

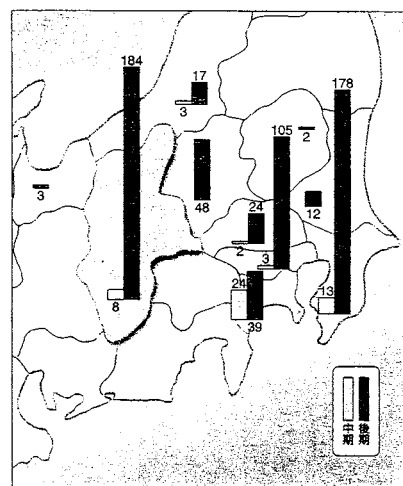
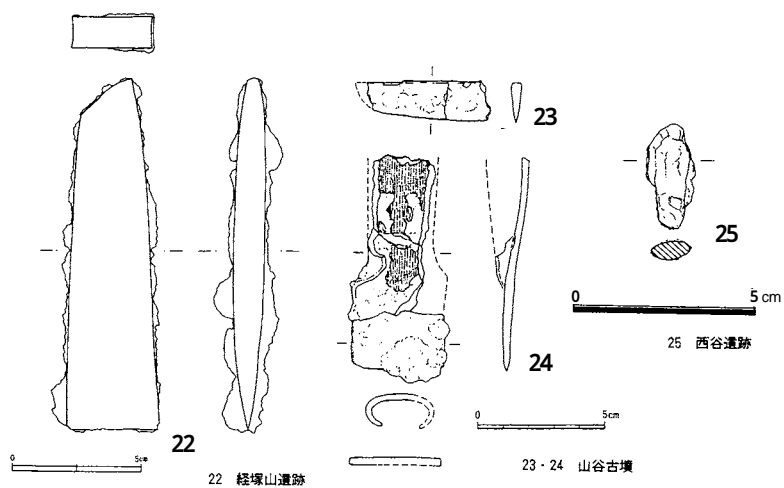
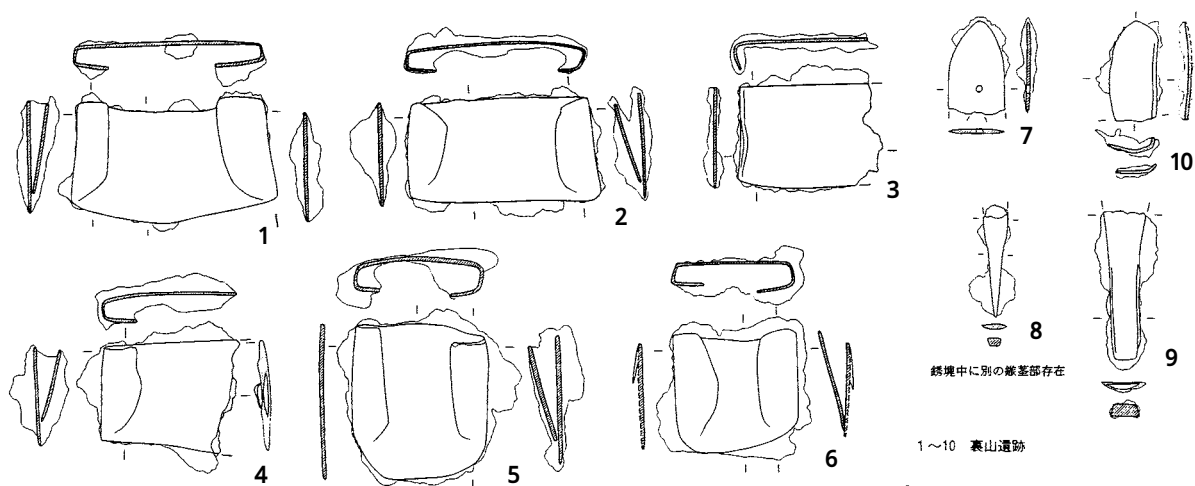




●印は鉄器出土グリッドまたは遺構

※アミ目は損壊範囲

0 10m



国信濃及び周辺地域の鉄器出土量

[大阪府立弥生文化博物館2001]



鉄器の導入と社会の変化

- 東北地方 -

斎藤 淳（青森県中里町立博物館）

東北地方においては、弥生後期～古墳時代に相当する3世紀～6世紀にかけて、石器の減少とともに鉄器の出土が散見されるが、南北の地域差が著しい。東北南部においては、土器群や墳墓の形態から北陸地方との関連がうかがわれるが、前方後円墳に伴う各種の鉄製品ならびに集落出土の羽口・鉄滓が報告され、すでに鉄の加工が開始されたと考えられる。一方、東北北部からは、北海道系土器を伴う土坑墓から刀子や農工具が出土する例が増加し、古墳文化との接触、活発な交流により鉄器化が進行する様子が看取される。

6世紀後半頃には、東北南部で大規模な鉄生産が開始され、北部では陸奥側を中心に終末期古墳が出現するが、この頃から東西（陸奥・出羽）の地域差が拡大傾向となる。特定の竪穴住居ならびに終末期古墳からは、従来の刀子や農工具に加えて新たに武具や馬具をはじめとする豊富な鉄製品が出土し、階層性の進行と鉄器の安定した流通が推測されるとともに、律令国家とのつながりを背景とした威信財的な役割が鉄器に期待されていたことが予想される。この頃から急増する集落からの鉄器の出土も一般的となり、鉄器の普及と畑作を中心とした開拓が表裏一体にあることをうかがわせる。

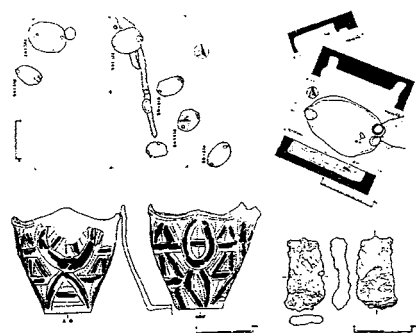
8世紀前葉には陸奥国に多賀城が設置され、周辺遺跡から製鉄炉・炭窯・鍛冶炉などが一体となった鉄生産遺構が見つかった。炉の形態等から北関東や東北南部との関連が考察されており、当該地方からの技術移入によって律令国家の管理の下鉄生産が行なわれた可能性が高い。生産された鉄器類は、城柵ほか東北北部の在地有力者層等へ配分されたと考えられる。一方出羽側では、8世紀前後に出羽柵（秋田城）が活動を始め、秋田周辺地域において若干の鉄生産関連遺跡が認められるものの、7～8世紀の集落は少ない。律令期の東北地方においては、律令国家が主導した鉄生産拠点を背景として、陸奥側の流通ルートが卓越していたことが考えられる。

9世紀前葉には陸奥国において志波城が創建されるが、城内からは多量の鉄器類と鍛冶遺構が検出されている。城周辺においても集落が倍増し、鉄器の出土量も増加するが、当該期の終末期古墳群においては次第に副葬品が簡素化する傾向が認められる。出羽側では、秋田城周辺において9世紀後葉ころの鉄生産関連遺跡が見つかり、製鉄炉の形態から北陸との関連が考察されている。これらも時期はやや下るものの、陸奥同様、律令国家の主導の下技術移入されたと考えられるが、元慶の乱（879年）前後を画期として、鉄生産の主体は米代川流域ならびに津軽地方に移行する。

津軽地域においては9世紀後葉以降、集落の爆発的な増加に伴って鍛冶遺構が急増し、「1集落1鍛冶遺構」というような活況を呈するが、これらの現象は人口増と津軽平野の急速な開拓による鉄器需要を反映したものと考えられる。10世紀後葉には防御性集落が出現するとともに、米代川中～上流域・岩木山麓に複数の炉を有する鉄生産遺跡が操業を開始し、鉄・鉄器生産は最盛期を迎える。集中・専門的な生産形態であり、北方への広域流通を目指した操業と捉えられる。

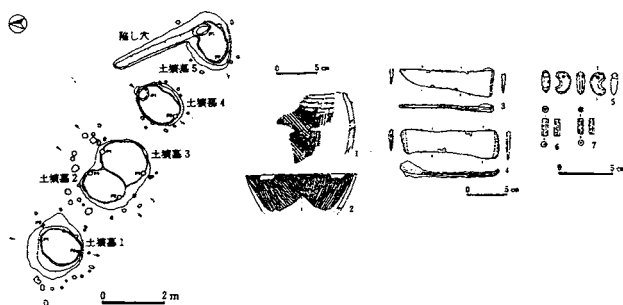
東北北部における鉄生産は、ほぼ防御性集落が廃絶する11世紀末頃まで続くと考えられるが、奥州藤原氏の下に統合される12世紀以降の鉄生産遺構は明らかでなく、南部鉄あるいは中国地方の鉄生産に集約された可能性がある。

Fig.1 寒川Ⅱ遺跡(秋田県能代市):3C後



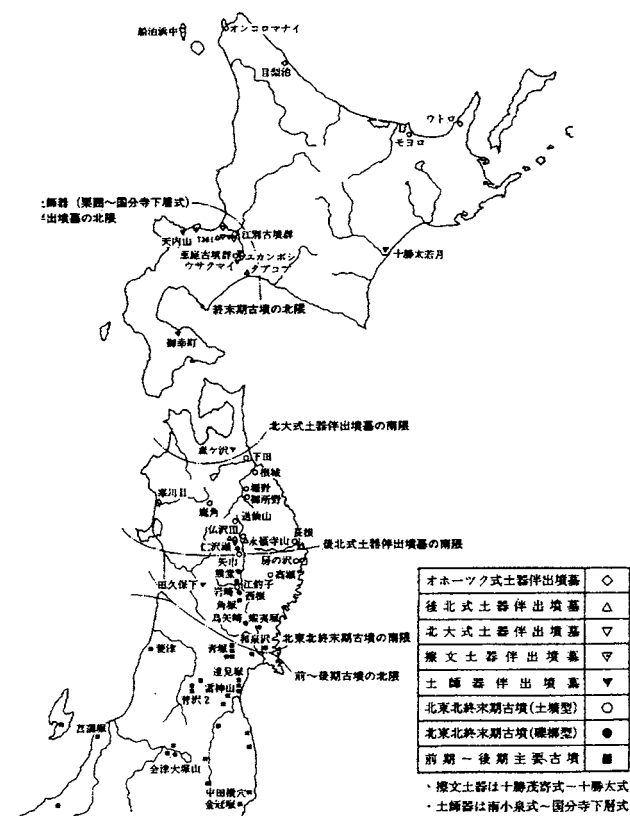
秋田県教育委員会 (ただし天野哲也 1997より転載)

Fig.2 永福寺山遺跡(岩手県盛岡市):4C前



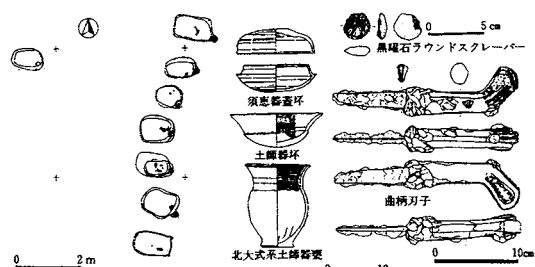
盛岡市教育委員会 (ただし阿部義平 1999「蝦夷と倭人」より転載)

Fig.4 東北地方の墳墓と古墳



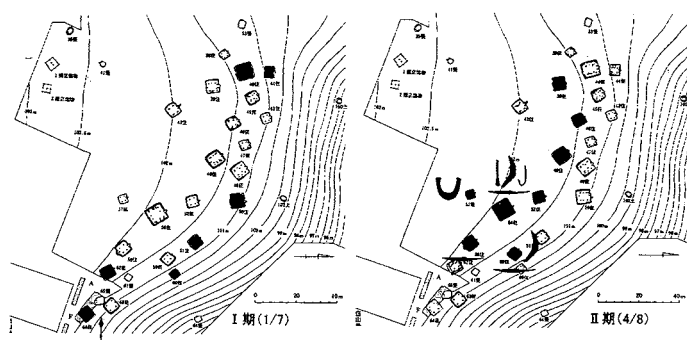
八木光則 1997～9世紀の墓制-東北北部の様相- 日本考古学協会1997年度秋田大会資料集

Fig.3 田久保下遺跡(秋田県横手市):6C



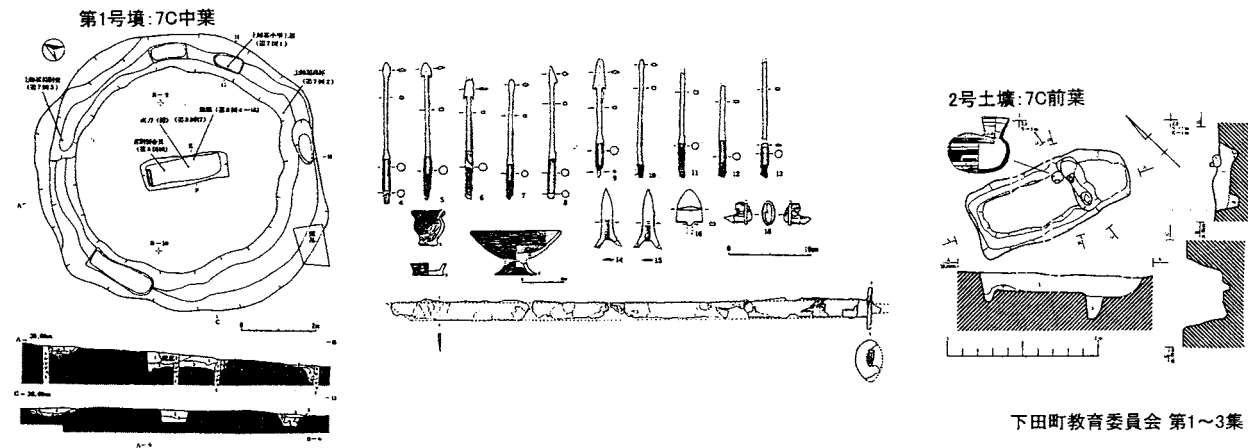
秋田県教育委員会 (ただし阿部義平 1999「蝦夷と倭人」より転載)

Fig.5 田面木平(1)(青森県八戸市):7C中葉



八戸市教育委員会 第34集

Fig.6 阿光坊遺跡(青森県下田町)



下田町教育委員会 第1～3集

Fig.7 十二林遺跡(秋田県能代市):10C前葉

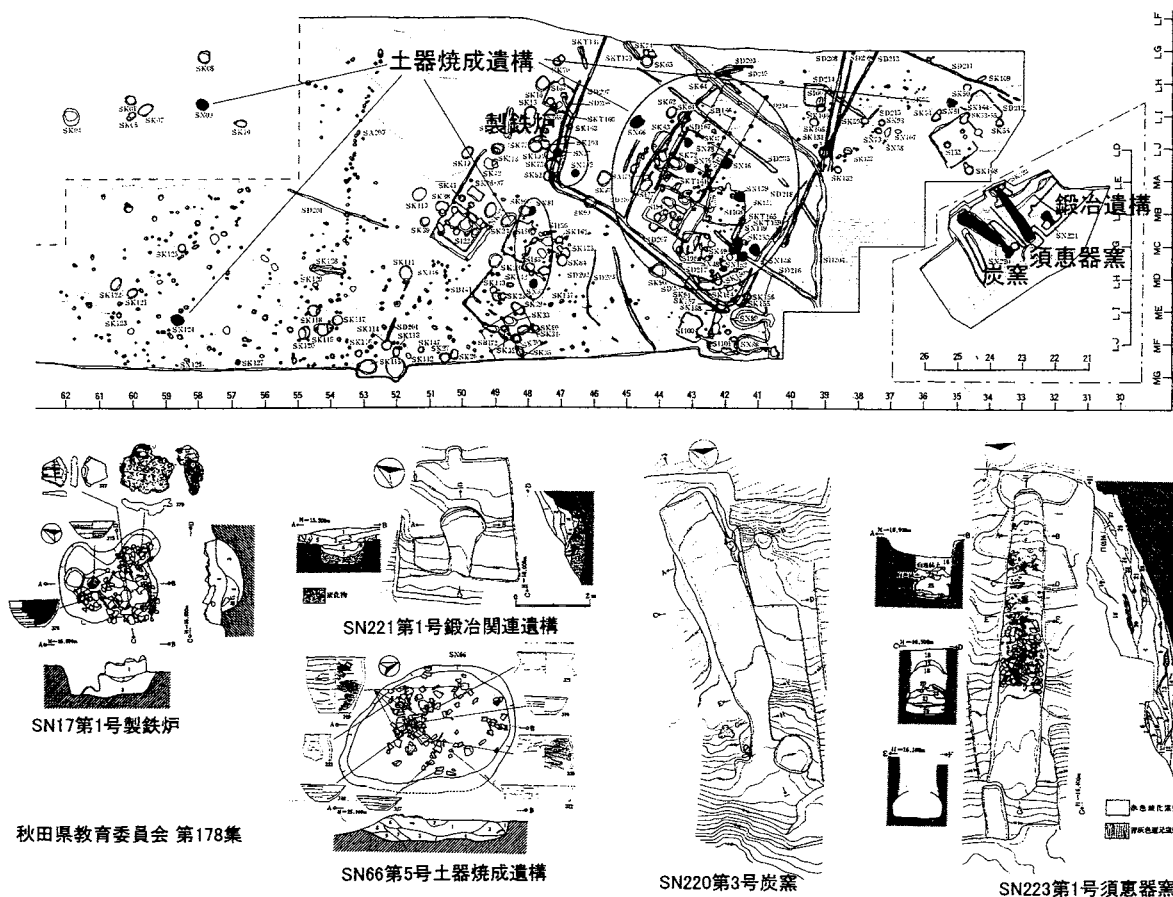


Fig.8 大平遺跡(青森県大鰐町):10C前葉~後葉

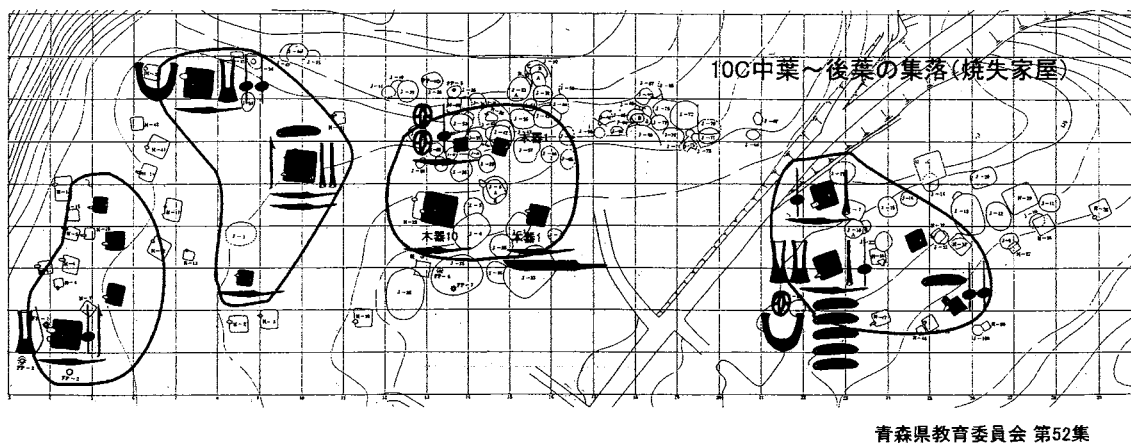
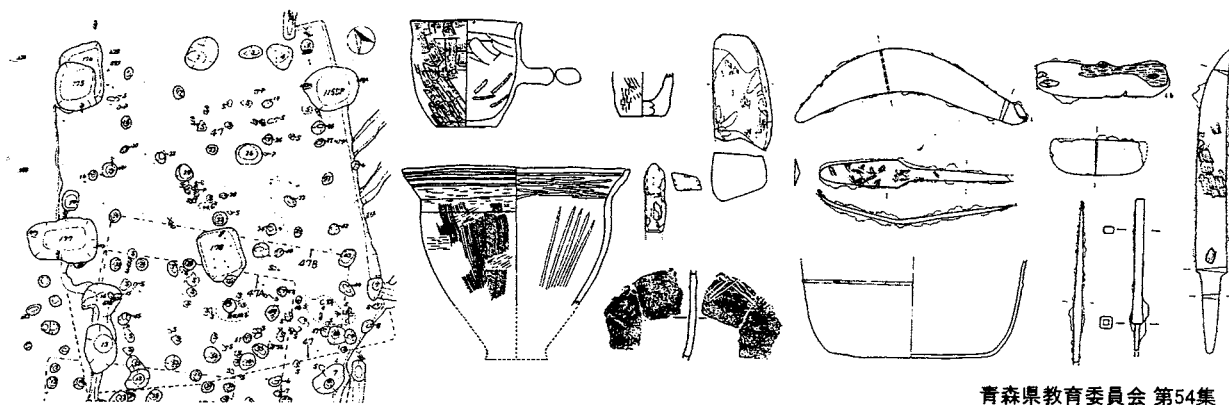


Fig.9 古館遺跡(青森県碓ヶ関村):10C後葉~11C後葉
第47号跡:11C前葉





鉄器の導入と社会の変化 - 北海道 -

三浦 正人（財団法人北海道埋蔵文化財センター）

北海道の鉄器の初源期は続縄文文化期前半（弥生時代にほぼ相当）である。現在のところこの時期の鉄器出土遺跡は多く見ても20ヵ所に満たない。骨角器にみられる鉄製利器による加工痕を含めてもまだ、極めて少量の鉄器が使用されていたに過ぎないと言える。鉄器の出土はほとんどが墓からと限定されている。

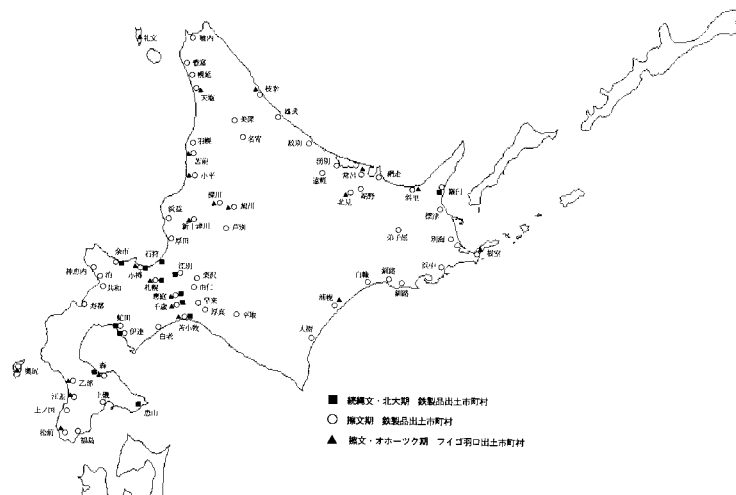
7～8世紀の続縄文時代末期の北大期になると土師器文化の影響を受け、石狩低地帯を中心とした道央圏で、東北地方末期古墳の副葬品と共通する太刀・蕨手刀・小刀・刀子・鎌・斧・針・鑢子などが、土坑墓に土器とともに副葬されるようになる。相前後して擦文文化が成立する。

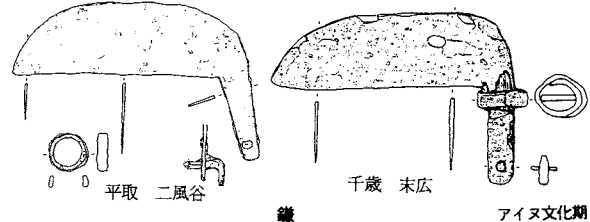
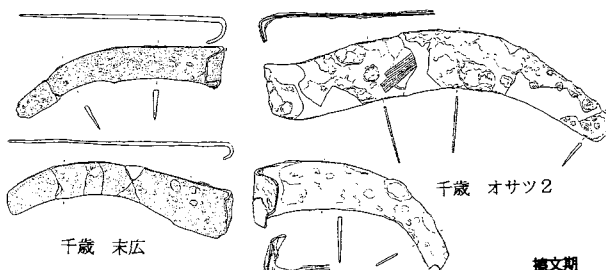
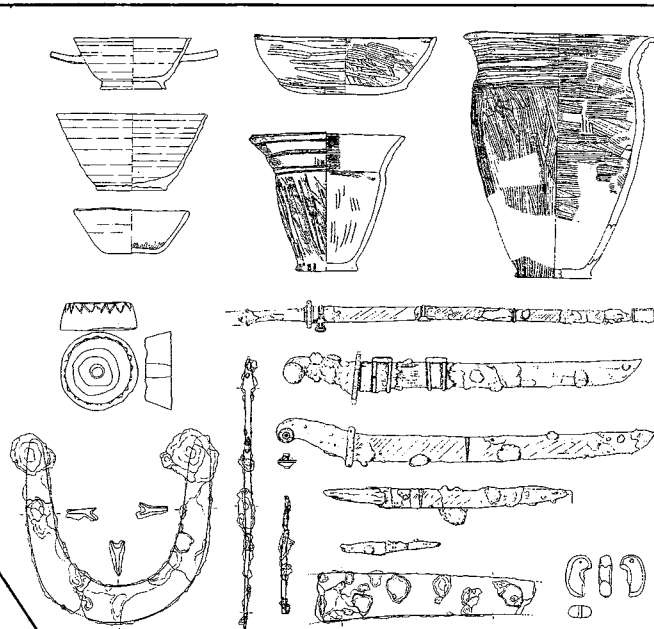
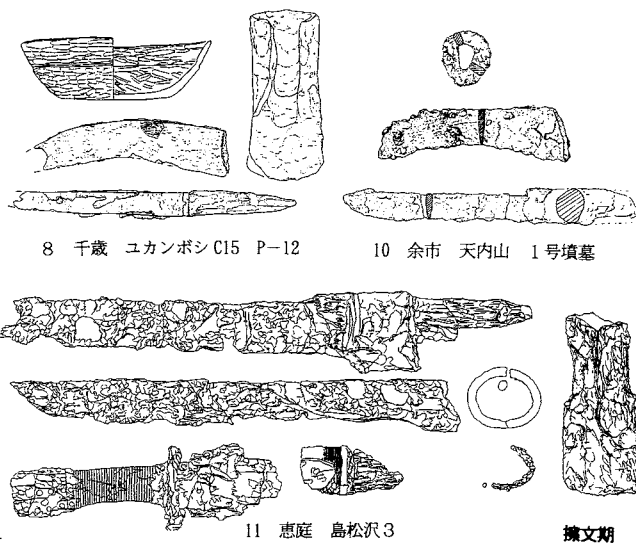
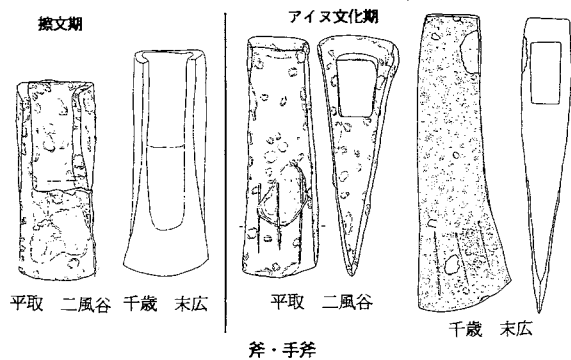
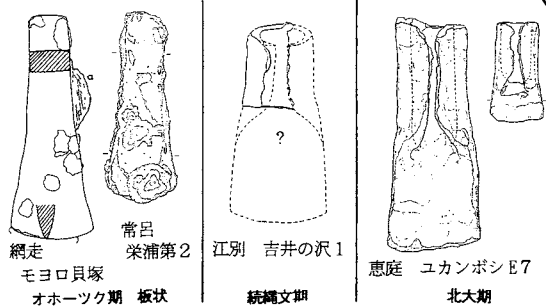
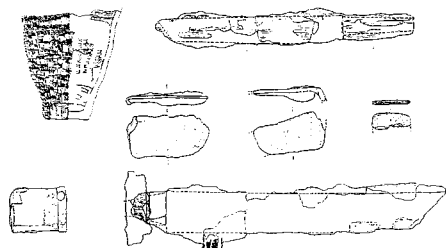
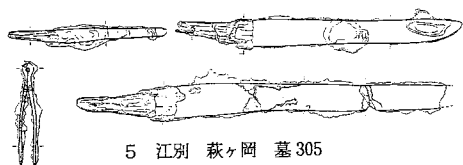
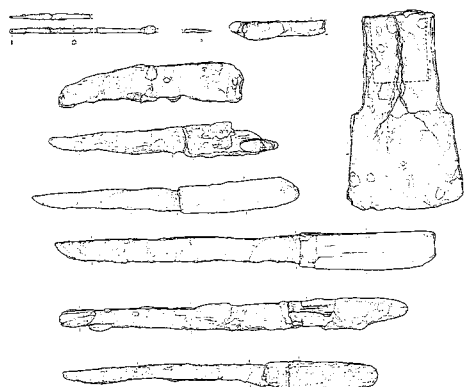
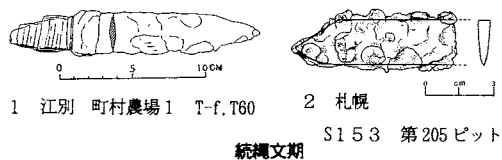
擦文文化期前葉の9世紀前半には北海道式古墳も築造され、同時期の土坑墓ともども多量の鉄器が副葬される。鉄製鍬先も登場し古墳の築造にも使用されている。北大期を含めて8世紀後半から9世紀前半のこの道央圏の状況が、交易のよるものか戦闘体制を反映するものかは検討を要するが、大きな社会変化がもたらされたのは確かで、擦文文化成立もこの事象によるところが大きいと思われる。

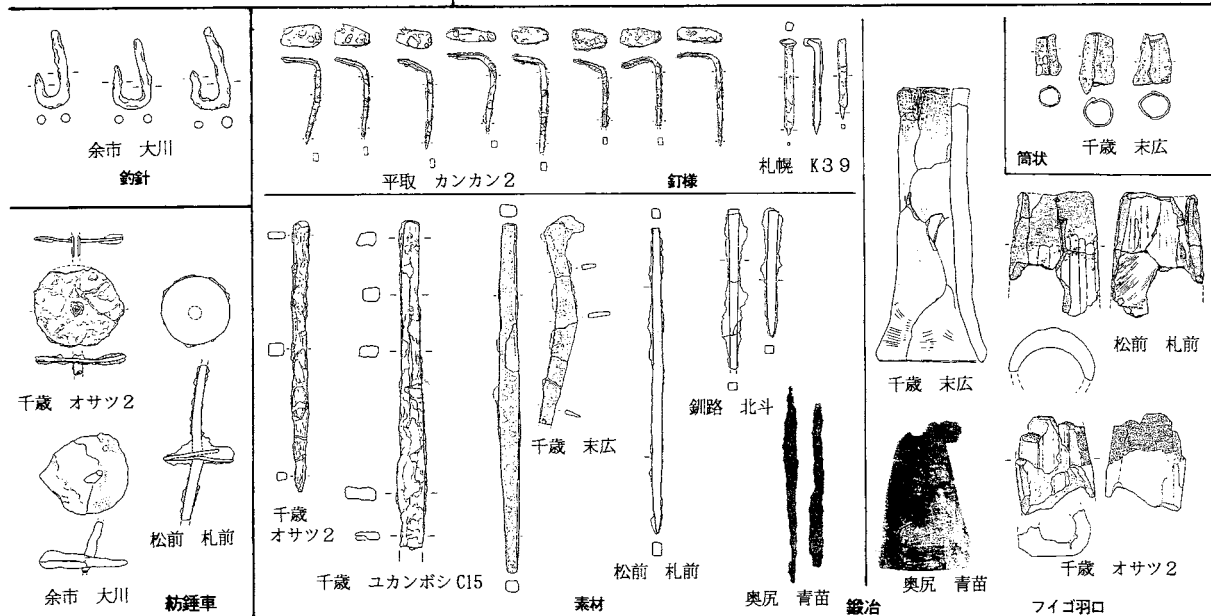
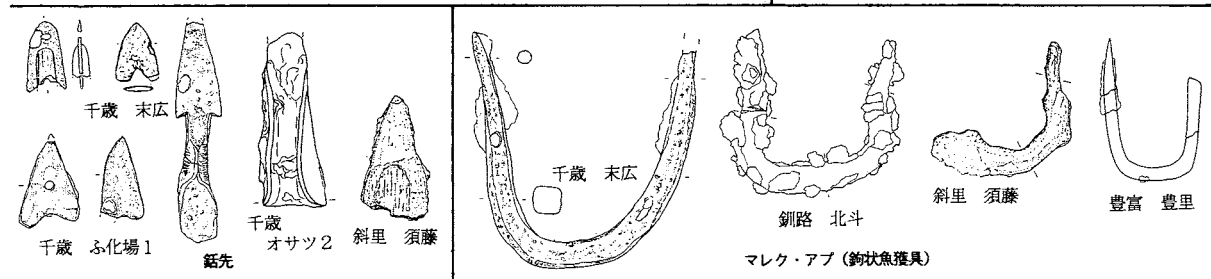
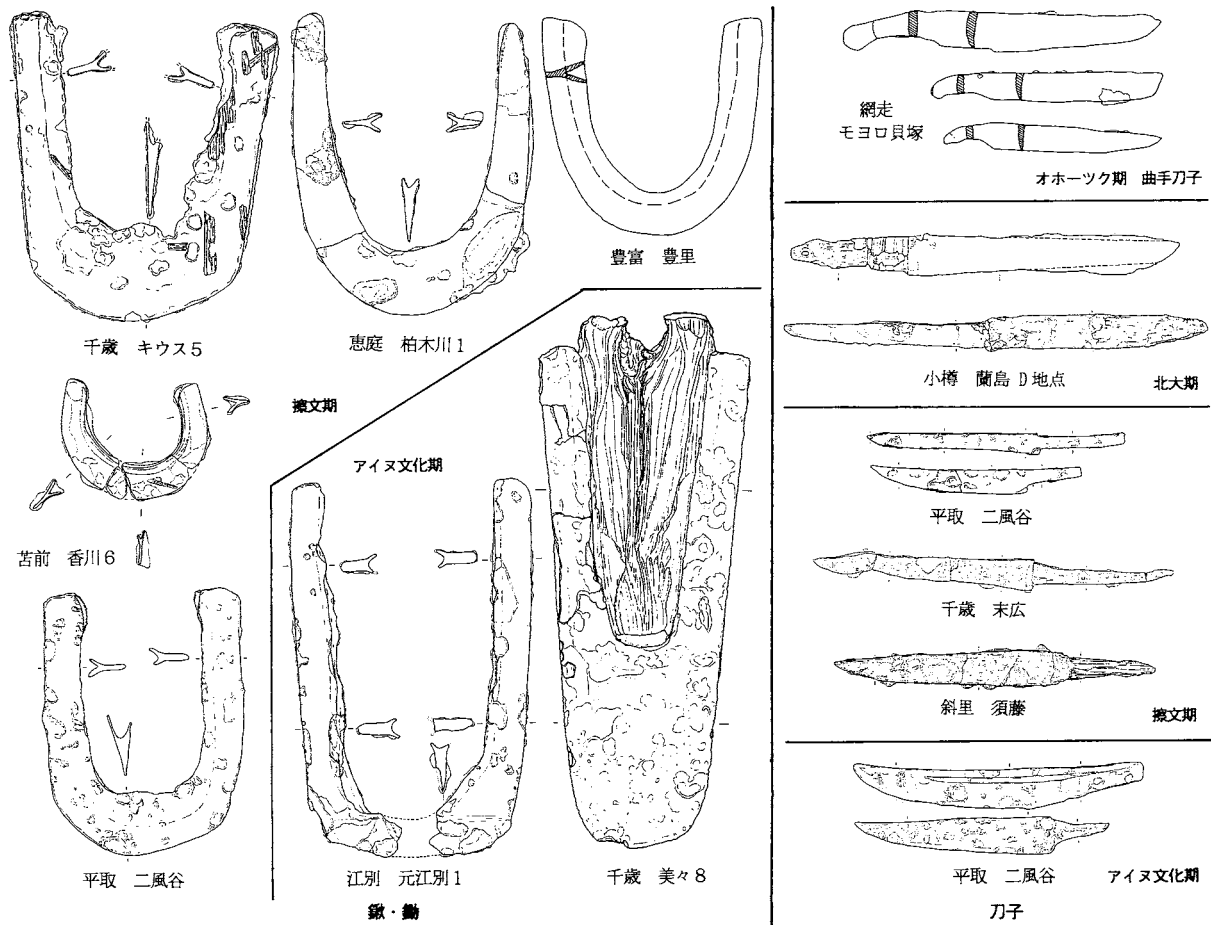
ところで、北海道では5～9世紀にオホーツク海沿岸を中心に道東部や日本海側の海岸線にオホーツク文化が広がる。特に道東部海岸沿いには北方からの民族が定住し、墓の副葬品や住居の出土品から見て豊富な種類と量の金属器文化を展開する。この文化は続縄文後半期や擦文文化と互いに影響しながら擦文文化に融合され、アイヌ文化の礎となる。鉄・銅・錫などの金属製品については、それぞれが供給元なのか供給先なのかは検討が必要だが、北方地域との交易・融合という点で多大な影響をもたらした社会変化を引き起こしたといえる。

9～10世紀以降の擦文文化期では、住居内での鉄器の発見例が主体となり、種類も刀・刀子・鎌・鍬・斧・針の一般的なものに加え、紡錘車・鉤状魚獲具や鉄製帯飾りも出土し、刀子の形状も用途別にか多様になる。金属学的解析からも指摘されるごとく、東北地方から製品とともに供給される鋼や銑鉄をもって鍛冶が行われていたことも、鍛冶遺構や鉄滓・鍛造剥片などの検出やフイゴ羽口・素材となる棒状鉄などの出土から明らかである。刀子や鉤状魚獲具などに自家製品と思われるものも多くなる。東北地方の生産地からの製品や素材の供給は交易によるものであり、交易権や集落内の鍛冶の有無が集落間の社会的階層や勢力状況・集団内での個人の地位・畑や漁獲などの生産活動に大きな影響を与え、社会変革が起きたに違いない。

北海道における鉄器導入の問題は東北・北陸地方との交易や交流、オホーツク文化を含めた北方との関わりといった汎日本海・オホーツク海的な広範囲の体系のなかで考える必要がある。







討論と展望

まとめにかえて

伊藤雅文（調査第4課）

「鉄器導入による社会の変化」というテーマで検討を行ったものであるが、鉄器の導入といっても製鉄とかかわる部分を意識的に外している。鉄器の使用には、鉄製品そのものを他地域から入手して使用することができる場合、鉄素材から製品を作り出し使用する場合、鉄原材料から鉄素材を作り出しさらに製品まで作る場合の大きく三つの状況がある。このうち第三点目を外したのは、製鉄の始まりが各地域によって时期的な違いがあることや、その時期が古墳時代なのかそれとも奈良時代なのか、平安時代なのかということにより、それぞれの背景とする社会が大きく異なり、それらを同列に扱うことが困難なためである。したがって、今回の研究集会では、鉄器を知らなかった集団がそれを知りそして使うことによってどのように人々の暮らしが変わったか、つまり社会がどのように変わったかをテーマとする。



研究集会

前半の各論では、西日本の弥生時代中心とする論の展開と、東北・北海道の古代から中世に論の中心があるものという違いがはっきり出てきた。発表者の興味を中心ということもあろうが、それぞれの地域における資料の偏りに起因したものでもあった。北陸でも新潟県では見かけ上急激に弥生の鉄製品の出土量が減り、東北ではまとまった資料が非常に少なく、地域の動きを知るには9世紀まで待たねばならならずそれが製鉄と結びついているところに、西日本との大きな違いを感じさせる。

討論では、主に鉄製品がそれぞれの地域に入るときの「動機」について意見交換を行い、それが普及するときの要因について各地位の様相を比較した。北部九州のような常に大陸とのつながりを持つような地域では鉄製品のような舶来物が入ってくるのは至極当然のことといえようが、それ以外の地域は寡占状況にある北部九州から移入する必要がある、そこには目的があるはずである。

鉄器が入ってくる時期を比較すると、東に行くにしたがって時期が下る傾向にあるものの、北陸でも東部を境にして大きなヒアタスがあった。各地域ともその時期をおおむね把握することができるもののその移入の動機まではわからない。先進的な新しい道具を受け入れるのにそれほど大きな動機付けが必要なのではあるだろうか。むしろその後の鉄器使用の展開の仕方が大きく異なっていることがわかった。山陰や丹後、北陸でも石川地域などでは玉作と深くかかわっているようであった。しかし、同じ玉作地域である越前での様



討論の様子

相が墳墓資料を中心としていることから十分に把握できないのが実情であり、同列に論議することはできない。

一方これら以東の地域では、弥生時代後期から古墳時代に鉄器の流入を認めつつもそれが普遍化しないところに大きな違いがある。当然といえば当然ながら、今回の研究集会でこの違いを確認することができた意義は決して小さいものではない。すなわち、東北では弥生時代後期、北海道は古墳時代後期とやや遅れるようであるが、鉄器の出土が見られるのである。それにもかかわらずその普及するまでにはかなりの時間を要しているのである。鉄器を知ることと鉄器を使うことの意義が違うことを示唆するものであり、それがその社会の状況によるものであるのかどうか問題となろう。



資料見学会の様子

資料見学会

翌2月23日に当センター研修室で、石川の初期鉄器資料を中心に資料の見学会を行った。新潟県の小池義人氏に裏山遺跡をはじめとする新潟県の資料を持参していただき、皆でじっくり検討させていただいた。また金沢市塚崎遺跡の一括や弥生時代の鉄器資料など、並べてみると本当に少ないことを実感した。しかも刀・剣等の大型鉄製品の少なさに同じ北陸でもやはり越前とは違う様相なのだなということもまた改めて認識し、個人的に

はこれが古墳の展開の仕方の違いを反映しているのかとも思った。

展望

今回初めて個別テーマによる研究集会を行ったわけであるが、事前の勉強会などの職員の問題意識の深化が十分にできなかった。理想としては、研究集会前に事前勉強会を何回か開きテーマに関する問題点を把握して研究集会の趣旨・目的とするところを理解するのが望ましい。このような勉強会によって研究集会の発表を理解し、それぞれがそれぞれの立場で問題点を把握し、その歴史的な意義を理解することができたであろう。

一方、現在の考古学研究全般に言えることであるが、研究の細分化に伴う専門として閉鎖的な環境にあり自分の専門以外への関心が比較的薄い状況にある。当埋蔵文化財センターの調査員にしてもよく似た傾向にある。今回の「鉄器」というテーマは、鉄器の実測さえ不十分な能力しか持たない職員がいる中でどれほど関心を持たせることができたか、それはどれほど職員各自に考古学的な問題として認識してもらうことができたか、ということにつながるが、その効果のほどは真摯に考えれば疑問なところもある。



資料見学会の様子

さらに、日々の発掘業務に追われ、そして遺物整理を淡々とこなし、普及業務の手伝い等々、発掘調査を通して考古学的な問題点を研究あるいは地域の歴史を考える時間が少なくなっていることと同時に、われわれ調査員の考古学研究への意欲が近年急速に衰えているように感じられる。これは、筆者の実感であり、個人的な体験でもある。調査組織が大きくなっていくにしたがって出てくるさまざまな問題点が調査員に波及しているのであろうか。それとも、調査員の資質自体がレベルダウンしているのであろうか。

このような当埋蔵文化財センターの現状からすれば、討論の中で職員からの質問が、あるいは意見がまったくなかったのは、寂しいことながら当然といえるかもしれない。熱弁を振るわれた各講師の方々にとって少々物足りなさを感じられたかもしれない

さて、弥生時代の鉄器の研究は愛媛大学の村上恭通氏等の研究により近年めざましいものがあり、この研究集会もその成果を受けて企画したものである。また、林大智氏の作業によりこれらの鉄製品の実態がまとめられ、ようやく他地域と比較することができるようになってきたことも大きな要因である。日本海側の初期鉄器は太平洋側の鉄器とは異なる流通であった可能性が高いことが指摘されているところであり、丹後地域での玉作と鉄製品とのかかわりが想定されているところである。山陰や北陸でも同じような玉作とのかかわりに興味をもたれる。いずれの地域も弥生後期以降に玉作製作で鉄器の比重が高くなり、その普及に重要な役割を果たしたことがわかった。しかし、玉作は日本海側のほとんどの集落で行なっているわけではない。

さらに、墳墓への鉄器の入り方を見ると、それぞれの地域で個性があるように、最低旧国レベルでの小地域における鉄器の実態把握もまた重要な作業であることがわかった。墳墓のみならず、遺跡での出土の特徴あるいは遺物としての特性等々各方面からの分析により、これから見出される地域ごとの差異の持つ意味が弥生時代から古墳時代へ移る社会の変革の中で重要になってくるものとする。

次に、日本海側における東北とそれより西の世界での鉄器の動きの違いにも注意しなければならない。単に古墳を作る社会に参入したかどうかという鉄器配布論で片付けることは、その地域における鉄器使用の意義を見出す作業を放棄することになる。むしろ、北陸までの鉄器を多く受け入れる地域とどのような点で違うのか考察することによって、逆に鉄器を受容する時の要因が見えてこよう。鉄という木や石・骨とは異なる「魔法の材質」で作られた利器の特性もまた見えてこよう。

別な見方をすれば、鉄器使用によって生産性が上がり可耕地を切り開くような図式は、それを受け入れる社会状況によって当てはまる場合とそうでない場合があることを示しているのであろうか。個人的な意見だが、鉄器を知ったときにその鉄器がどのような種類のものであるか、ということも大きな違いを生じる要因であろう。たとえばバブアニューギニアで石器社会から一気に鉄器を知った人々がそれを使うのに斧等ではなくて鍋等の器具を使ったことは、生産用具の効率化よりも違った意義を鉄器に見出したのである。時代をさかのぼればさかのぼるほど鉄器と出会ったときの種類は限定されるであろうし、それを受け入れるかどうかということは地域の集団にとって非常な重要事項であったはずである。

研究集会テーマは「鉄器の導入と社会の変化」という大きなものであったが、その場では深く掘り下げることができなかった。しかし、鉄器を使用する意味、ということを考えればまた違った研究視点も見出せよう。近年、鉄器研究がブームのようになっているようだが、皆が同じような視点で研究を行うのではなく、今回の研究集会で行った時代性の垣根を取り払ったところに、新たな研究が生まれる期待が大きいことを示している。